

活動する人と応援する人をつなぐ

公益財団法人
北海道新聞野生生物基金



モ〜リ〜通信

Nature Communication Magazine MALLY

No.3 2024 July



取り組む人びと

[助成事業のレポートより]

[特集]

もっと知ろう・動物園

動物園の自然保護活動

3 取り組む人びと [助成事業のレポートより]

市民による小さなヒグマ対策の実施と
4 ネットワーク形成
浦幌ヒグマ調査会



外国人留学生が見た北海道の自然環境を紹介する
6 多言語ホームページ等の作成と学生による自然環境
保全ワークショップの開催
国際交流サークルSukaRela(スカレラ)

北海道の海浜生態系の魅力と
8 保全の重要性を伝える！
特定非営利活動法人 EnVision環境保全事務所

子どもエコたんけん隊
10 ~川であそんでしらべよう！~
NPO法人自然教育促進会

ポー川史跡自然公園保全活用事業
12 NPO法人自然・文化遺産保存活用ネット

ワークショップ「北海道における捕獲され
14 た野生動物を用いた屠体給餌の可能性」
酪農学園大学農食環境学群環境共生学類環境法研究室
遠井朗子

15 北海道島嶼部アマガエルの一斉調査
利尻島ウミネココロニーについて考える会

道央圏のタンチョウ飛来状況の把握と
16 飛来情報の集約
道央圏タンチョウ見つけ隊

18 幌向湿原再生事業
特定非営利活動法人ふらっと南幌

別海町別海地区の主要な湿原の調査
19 および保全対象化
齋藤 央

20 天売島におけるウミスズメの保全活動
北海道海鳥センター友の会

21 カラス対応マニュアルなどの制作
NPO法人札幌カラス研究会



22 北海道新聞野生生物基金 [寄付金のご報告]

24 北海道新聞野生生物基金 [サポート企業]

25 北海道新聞野生生物基金 [2024年度事業計画]

26 北海道野生生物写真コンテスト (入賞・入選作品)

32 第30回夏休み自然観察記録コンクール

特集 もっと知ろう・動物園

35 動物園の自然保護活動

札幌市円山動物園

36 トガリネズミとニホンザリガニの保護活動
(トガリネズミ)文・写真◎飯島なつみ (ニホンザリガニ)文・写真◎片岡雅人

釧路市動物園

40 タンチョウの保護活動
文・写真◎吉野智生

45 「北海道産いきもの保全プロジェクト」
文・写真◎坂東 元



えんしんは、地域 を支え続け、地域と ともに発展します。



当金庫は、遠軽町に本店を置き、近隣の北見市、紋別市をはじめ旭川市、札幌市など13市20町1村の広域を事業基盤に、事業や生活の繁栄のお手伝いをするとともに、地域社会の一員として地元の中小企業者や住民との「絆」を形成し、地域社会の持続的発展に努めております。

夢付き定期預金

スーパー ドリーム

懸賞金総額 **3,680万円**

100万円当選者がでています!

100万円×8本

10万円×80本 3万円×160本

1万円×800本 1,000円×8,000本

※ドリーム大賞は、抽選で決まった1つの当選番号から昇順に10本連続した番号が全て賞金10万円の当選となるもので、10本連続で当選された場合、1本10万円×10本で最高100万円が当たります。
※取扱期間終了時において発売実績が800億円に満たない場合には、懸賞金の当選本数及び懸賞金総額が表示されている本数・金額より少なくなることがあります。
●お取扱期間 / 2024年4月1日～2024年9月30日 ●抽選日 / 抽選場所 / 2025年3月7日(金)当金庫本店で行います。 ●ご利用いただける方 / 個人のお客様 ●募集総額 / 800億円 (募集総額800億円が完売となった場合には、1ユニット10億円を単位として増額、又は取扱期間終了日を待たずに募集を終了する場合があります。) ●ご預金の種類 / スーパー定期、スーパー定期300 ●お預入期間 / 1年 (自動継続扱い) ●お預入金額 / スーパー定期は、10万円以上300万円未満、スーパー定期300は、300万円以上1,010万円未満 ●金利 / スーパー定期又はスーパー定期300の1年もの店頭表示金利 ●懸賞金抽選権 (抽選番号) / 1口 (10万円) あたり1本の懸賞金抽選権 (抽選番号) をお付けします。 ●懸賞金抽選権 (抽選番号) は1,000番から1,999番までの1組1万本で1ユニットとします。抽選日の前月末までに解約された場合は、懸賞金抽選権 (抽選番号) は失効します。 ●当選番号の発表 / 抽選日の翌営業日以降に店頭に掲示します。 ●重複当選の場合の取扱方法 / 抽選の結果、同じ抽選番号が2つ以上の賞に重複して当選し、懸賞金合計額が税引前で10万円を超えた場合には、次の順位により上位の等級の賞を当選とし、下位の当選を無効とさせていただきます。①ドリーム大賞②1等賞③2等賞④3等賞⑤4等賞 ●懸賞金の支払方法 / 当選した場合には、2025年3月27日(木)にご指定の預金口座にお振り込みします。(懸賞金には、20%相当の税金が課税されます。ただし、2013年1月1日～2037年12月31日までに受け取る懸賞金については、復興特別所得税が追加課税され、20.315%の税金が課税されます。) ●その他 / やむを得ず満期前に解約される場合は、預入期間に応じた中途解約利率を適用させていただきます。本商品は、預金保険制度の対象商品です。 ●店頭に「商品概要説明書」を用意しております。





Activities Report 取り組む人びと

現場からの活動レポート

(北海道新聞野生生物基金・助成事業報告書より)

公益財団法人北海道新聞野生生物基金は、北海道の自然や野生生物の保護に地道に取り組んでいる団体・個人に事業の活動資金を助成し、支援しています。2023年度は一般助成が8団体・個人に190万円、杉本とき鳥類保護助成基金が3団体・個人に100万円の総額290万円を助成しました。



(公財)北海道新聞野生生物基金は、北海道新聞社の創立50周年を記念して1992年に設立しました。「北海道の広大で豊かな自然に生きる野生生物を未来に引き継ぎ、道民が健康的に暮らせる郷土づくりを応援する」を目的に活動を続けています。

助成事業

自然・野生生物保全の団体・個人に助成

北海道の自然や野生生物の保護に取り組む団体・個人の活動に助成しています。一般助成のほか、2017年度から「杉本とき鳥類保護助成基金」を創設し、合わせて毎年10～20団体・個人を選考しています。



普及啓蒙事業

シンポジウムやフォーラムの開催

北海道の素晴らしい自然を守る活動や生物多様性保全の取り組みを紹介し、皆さんと一緒に北海道の未来を考えていきます。



自然体験事業

自然・環境出前講座

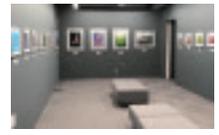
全道各地の学校や地域学習の場などに動植物の専門家を講師として派遣し、自然と野生生物の尊さを学んでいただきます。講師派遣費用は当基金が負担します。



コンテスト事業

北海道野生生物写真コンテスト

北海道内で撮影された野生生物の写真を広く募集し、動物と植物の2部門で1席、2席、3席、優秀作などを選び、賞品を贈呈します。入賞・入選作の写真展も開催しています。



環境エクスカージョン

道内の大自然をフィールドにした親子エコキャンプや全道フットパスの集いなどを共催しています。自然に親しむ活動を後押しします。

モーリーの森づくり

2006年から石狩管内当別町で2012年から2022年まで空知管内栗山町で植樹事業を行い、コロナ禍前の2019年まで道新こども新聞「まなぶん」のこども記者や地元の子どもたちに参加してもらい、植樹と種まき、苗づくりなどを行いました。



夏休み自然観察記録コンクール

北海道自然保護協会との共催で毎年、全道の小学校に呼びかけて、子どもたちが夏休みに動植物の生態や自然の不思議などを観察し、絵や作文、絵日記にまとめた作品を募集しています。優秀作品は道新こども新聞「まなぶん」に掲載しています。



出版事業

『モーリー通信』の発行

助成事業の報告をメインに、北海道の自然環境の現状や、寄付者の紹介、写真コンテスト入賞作品など「活動する人と応援する人をつなぐ」をテーマに発行。



カレンダー販売事業

オリジナルカレンダーの発行、販売

北海道野生生物写真コンテストの入賞・入選作を含む応募作品の中から、その月ごとにふさわしい写真を選び、カレンダーを制作しています。動物部門は、迫力ある写真を掲載した大判と愛らしい写真を掲載した中判の吊下げ型。植物部門は卓上型で美しい花などを紹介し、使用後はポストカードとして使えます。



北海道新聞野生生物基金は皆様の寄付で運営しております。当基金へのご理解と、ご支援・ご協力をお願いいたします。北海道新聞野生生物基金への寄付は繰り込みのゆうちょ銀行払込取扱票をご利用ください。

銀行振り込みの場合は下記の口座をご利用ください。
 北洋銀行本店営業部 (普通預金) 1456131
 北海道銀行本店営業部 (普通預金) 1704635
 名義は「公益財団法人北海道新聞野生生物基金」
 フリガナ (ザイ) ホツカイドウシンブンヤセイセイブツキケン



草刈り活動や生態を知るための勉強会など、10周年を迎えた都市における市民参加型のヒグマ対策。



石山地区河畔林草刈りの様子

北海道新聞野生生物基金の助成を受けて2014年に開始した、札幌市南区石山地区の豊平川河畔林における市民によるヒグマ侵入防止草刈り活動は、その後も継続され22年で9回目を迎えました。今年度草刈り活動10周年を迎えるにあたり、これまでの歩みや活動の展開の振り返りを含めたイベントを、草刈り活動と併せて開催。また各地に広がってきた市民によるヒグマ対策を横につなぎ、対策の意義を改めて確認するとともに、それぞれの活動間の情報共有と、情報交換を行うネットワークの形成のために10回目の草刈り活動とフォーラムについて報告します。

今年度は8月6日に「豊平川草刈り&ヒグマの生態勉強会」と題して、札幌市南区石山地区の豊平川河畔林において草刈りを開催しました。当日は地域住民の方々、札幌市職員、メディア関係者、大学生などあらゆる業種と幅広い年齢層の方にご参加頂き、参加者数は48名に上りました。草刈りは9時から11時まで6班に分かれて、スタッフリーダーの指示のもと行いました。最初は何も見えず、草が生い茂っていた河畔林が、最終的には川が見渡せるほどになり、ヒグマの移動経路を分断することができました。草刈り後の勉強会では、石山地区草刈り活動10年の歩みについて、浦幌ヒグマ調査会事務局長兼酪農学園大学教授の佐藤喜和氏から発表が行われました。また、同大学の大学院生からは、ヒグマの基礎的な生態に加え、石山地区豊平川付近のヒグマ出没情報などを学び、これまでの草刈り活動を振り返りました。その後は地域主体のビンゴ大会が行われ、とても盛り上がる会となりました。



フォーラムの集合写真

53名の方が参加しました。道内8つのヒグマ対策活動の報告や、札幌市行政から事例報告をして頂き、その後は「活動をつづけたその先について」や「活動を継続する上での困り



ワークショップ（フォーラム）の様子

ごと」「これから活動を始めるには？」の3テーマ6グループに分け、経験のあるファシリテーターに進行と取りまとめをしてもらいながら、ワークショップを実施しました。参加者からは「様々な立場・年代の人と話ができてよかった」という声が聞かれた一方で、活動

の担い手不足などの課題を抱えていることも分かりました。フォーラム終わりにアンケートを行い、長きにわたり活動している石山地区の草刈り活動も、4割の方に周知はされていないという結果になったため、これまで通り草刈り活動を行うとともに、チラシやSNSなどを用いた活動の告知や終了後の報告を行うことで、このような輪がもっと広がっていくと考えています。また、フォーラムの感想を集計したところ、多くの方々が新たな知識を得られたと回答しており、今後の活動継続への前向きかつ好意的な意見が寄せられていました。同時に人材不足や担い手の高齢化など今後の懸念点を再確認し、正しく現状を認識している参加者の熱意も感じられる結果となりました。

10回目の活動を終えた今、さらなる継続と水平展開を願い、今までの軌跡を「札幌市石山地区ヒグマ対策10年の歩み」という題で、記録として残すことにしました。本記念冊子は石山地区の地域の方々、草刈り活動やフォーラムの参加者、浦幌ヒグマ調査会会員などに送付しました。



外国人留学生たちと取り組んだ 北海道の自然環境を知ることと世界に発信すること。

国際交流サークル SukaRela は、2006年に酪農学園大学に発足した国際交流を目的としたサークルです。語学を習得したいという学生から、将来海外で働きたいという学生まで、さまざまな動機を持ったメンバーで構成されています。部員は、酪農学園大学の学生が中心ですが、他大学や高校からも募り、横断的な活動を行っています。

- 国内での活動
 - ・サークル部員や学生の国際交流および国際理解のきっかけづくりやサポート
 - ・留学や国際交流イベント等に関する情報を共有し、部員の参加機会の拡大
 - ・留学生との交流イベントを企画し、サークル外の学生の国際理解のきっかけづくり
 - ・その他、勉強会を開催し、お互いに意識や実力を高め合える環境をつくる
- 海外での活動

- ・中国、フィリピン、マレーシアにおける植林による自然再生事業
 - ・マレーシアにおける野生動物調査
 - ・海外の大学とのオンラインによる交流
- これらの活動を通じて酪農学園大学の学生のみならず、国際交流に関心のある若者と一体となって積極的に活動しています。

本事業の狙い

国際交流サークル SukaRela とともに、酪農学園大学等で野生動物や森林の保全について学ぶ外国人留学生に、北海道の国立公園等を取材してもらい、専門的な目から見た北海道の自然を紹介する多言語(英語、中国語、マレーシア語等)ホームページ及び Youtube 動画を作成し、広く海外に紹介することにより、北海道の自然環境の素晴らしさを普及するとともに、海外の大学との交流の推進や、自然環境の保全に関心のある観光客の誘致を図ることを目的としています。

また、外国人留学生と北海道の高校生、大学生とのワークショップ及びポスター展を円山動物園と旭山動物園で開催し、北海道の抱える課題を話し合うとともに、お互いの自然環境の保全について議論し、課題解決に向けた提言を行い、北海道のSDGs、特に目標15の「陸の豊かさ」の達成に貢献することを目的とします。

実施主体

主催 国際交流サークル SukaRela
及びマレーシアサバ大学留学生
協力 酪農学園大学、札幌市円山

動物園、旭川市旭山動物園ほか
地域 北海道内の国立公園、国定公園

方法と結果

部員とマレーシアサバ大学の学生が協働して、大沼国定公園、支笏洞爺国立公園、大雪山国立公園、知床国立公園、阿寒摩周国立公園、サロベツ湿原について現地取材を行いました。これらの成果は、「留学生が見た北海道の自然」サイトとして、これからこれらの地域を訪れる留学生や海外の観光客に



ホームページ



羅臼高校生とマレーシアサバ大学学生

わかりやすいように日記風にまとめたホームページを構築しました。また、その様子を記録した動画を編集し Youtube チャンネルで配信しています。

多言語ホームページ、Youtube チャンネルの作成

外国人留学生が見た北海道の自然公園紹介ホームページの構築。
Hokkaido Nature Discovery (北海道の自然発見)
In the eyes of international students (留学生の視点から)
URL <https://hokkaidond.wixsite.com/hokkaidond>

羅臼高校、とわの森三愛高校におけるワークショップの開催
日時/23年9月8日、9日



海外の大学とのオンラインワークショップの開催

8月30日に、マレーシアサバ大学とオンラインでのワークショップを開催し、北海道の自然環境についてプレゼンテーションを行いました。





知ってほしい豊かな海浜の自然。 海浜の植生と生態系の保全のため、 春国岱と石狩浜で取り組んだエゾシカと外来種の対策。

事業の狙い

北海道では、ニホンシカ(亜種エゾシカ)が海岸線でも生息しており、国内の海岸砂丘などに生育する希少な植物(以下:海浜植生)への影響が深刻です。しかし北海道では、海浜植生の保全に取り組む地域の個人と団体での情報交換の機会が少なく、共通する課題などについてこれまで議論できる場が設けられませんでした。各地域(東部:根室市春国岱、西部:石狩市石狩浜)で関係者および市民が集まり、各組織からの海浜植生の保全の意義、課題について議論する場を設けました。両地域ではこれまで、活動団体が積極的に保全活動を進め、特徴を活かした活動(例:春国岱でのエゾシカ対策、植生保護柵、鳥類調査など。石狩浜での市民活動、外来種対策、ハマナス育種など)を実践してきました。しかし情報交換の機会が少なく、共通の課題として都市住民(札幌圏)への普及啓発も不足しています。そこで本活動では、両地



石狩浜での活動

フォーラム
【日時】12/22(金) 13:30~15:40
【場所】札幌エルプラザ 2階 環境研修室(札幌市北区北8条西3丁目)
【参加者】会場:20名(申込:15名)、オンライン:82名(申込:77名)全102名
【参加費】無料
【申込方法】会場:オンライン共に要申込
【共催】環境省 釧路自然環境事務所・NPO法人 EnVision 環境保全事務所
【後援】北海道新聞野生生物基金・札幌市円山動物園
【講演内容と講演者】
○国内外のシカ類の海浜植物への影響:吉田剛司(NPO法人 EnVision 環境保全事務所)
○春国岱(根室市)での取り組みと研究:上畑華菜(環境省釧路自然環

境事務所)、小林恒平(NPO法人 EnVision 環境保全事務所)、外山雅大(根室市歴史と自然の資料館)
○石狩浜(石狩市)での取り組みと研究:高橋恵美(石狩市石狩浜海浜植物保護センター)、内藤華子(合同会社いしかり植物ラボ)
○動物園での展示と普及啓発:相田佑樹(札幌市円山動物園)
○総合討論・質疑応答(講演者全員)

実施の様子

春国岱(根室)では、エゾシカによる海浜植生への被害が深刻化しており、様々な組織が調査を実施しています。これらの調査結果は、エゾシカの侵入が、まだ深刻化していない地域での有用な事例となる事が確認できました。石狩浜(石狩)では、砂浜の後退や人為的な環境変化による海浜植生への影響は明らかとなっており、一方エゾシカによる影響は誰も明確に把握できていないことが判明しました。エゾシカによる採食圧と踏圧により、海浜植生に深刻な被害が出ている根室市春国岱、そして近年エゾシカの侵入が確認され、影響が懸念される石狩市石狩浜での調査結果や取組をフォーラム形式で紹介することで、札幌市を中心とした都市住民、さらにはウエビナーとして日本国内(北海道から沖縄まで)の様々な地域からの参加者に対して、海浜植生や、それへの興味や関心を高めました。春国岱より、シカの植生被害の現状、行政(環境省)が実施する植生保護柵の設置、さらにはNPO団体と札幌市円山動物園が実施した行動追跡の結果を紹介しました。



フォーラムの様子



春国岱での活動

域での活動実績があり、市民への普及効果がある札幌市円山動物園と協働で、海浜植生保全に必要な技術と知見を市民と専門家で共有し、新たな北海道での海浜植生保全の潮流を生むことを目的としました。

春国岱・石狩浜 魅力発掘ワークショップ

【実施日】8/10(木)、9/11(月)、26(火)、10/16(月)、11/2(木)、12/19(火)、1/25(月) ※打合せ含む

【場所】春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンター(根室市)、円山動物園(札幌市)

【参加者組織】環境省 野生生物課、根室市 農林課、根室市 観光協会、公益財団法人 日本野鳥の会、石狩市 環境市民部自然保護課、合同会社いしかり植物ラボ、札幌市 円山動物園、EnVision 環境保全事務所

石狩浜では、シカの侵入を確認していますが、まだ定量的な調査などが少ない現状が紹介され、活動の一例として、札幌市円山動物園のエゾシカ舎でのシカ柵内のハマナスに関する展示を紹介しました。フォーラムは、登壇者の情報交換の機会にもなり、根室・石狩のネットワークの強化につながりました。また、会場を含め、全102人の市民が本フォーラムに参加しており、北海道の海浜植生とエゾシカについて、またその周辺環境について、広く普及啓発する機会となりました。会場のみならず、WEBでの多くの質問がありました。

例えば、会場には、石狩地域で研究を進める市民も参加しており、それぞれの知見を交換する場にもなりました。実際にフォーラム後には、石狩浜にて調査を実施している団体より、エゾスカシユリなどに対するエゾシカの食痕に関する情報提供もありました。

課題

現地視察なども含む活動が実施できることが望ましい(参加者意見として)。



川遊びや自然観察、図書館で調べることの楽しさを体験することで人とのコミュニケーションや生物多様性と環境を守ることの大切さを学びます。

事業の目的

川と周辺の河川敷の豊かな自然の中で遊びながら、生物を観察し、学び、発見することで生物の多様性とその大切さを知り、地球環境を守る意識を高めることを目的としました。

さまざまな分野の専門家を迎え、障がいや発達に特性のある児童・生徒（小学1年生～中学生）など支援を必要とする就学児童・生徒が川での自然体験活動と図書館での探究活動を体験することが目的です。参加費は2回とも無料。

座談会・説明会

【日時】23年7月16日(日)座談会13:30～14:30 説明会15:00～16:00
【場所】札幌市生涯学習センター ちえりあ2階大研修室
【講師】札幌龍谷高校メディアセンター(数学教師)・吉本拓郎さん/探究教室(LANSKY)(WEBデザイナー)代表・青砥愛子さん/放課後等児童デイサービス自然学校発寒代表・安原明宏さん/同 児童発達支援管理責任者・川村美和子さん
【司会】NPO 法人自然教育促進会理事長 安原政志

【参加人数】6家族(保護者7人、子ども8人) 合計15人

各講師の仕事とこの事業の説明。保護者へ今までの自然体験活動の有無、図書館利用の有無について確認をしました。ほとんどの方が自然体験の活動経験がなく、川あそびへの関心が高いことがわかりました。図書館利用は4家族が地域の図書館利用経験があり、それぞれ興味のある分野の絵本、物語などで図書を楽しんでいました。説明会では要項を中心に説明し、特に川たんけんでの服装、持ち物の質問が多く、個別に答えました。

川たんけん編

【日時】23年8月20日(日) 9:00～16:00
【場所】放課後等児童デイサービス自然学校発寒 琴似発寒川左股川(福井緑地)
【講師】安原政志、NPO 法人自然教育促進会自然教育部部長・中村隆、安原明宏さん
【スタッフ】川村美和子さん、放課後等児童デイサービス自然学校発寒社会福祉

その後、琴似発寒川の水位が下がってきたので、昼食後に予定していた場所の上流「福井緑地」の左股川で遊びました。ライフジャケットを着用して魚捕りにチャレンジしました。川は濁っていましたが、ヤマメやウキゴリなどの川魚を探ることができて、子どもたちは興奮気味でした。川の流れに身を任せて川下りを楽しむ「カッパの川流れ」遊びも好評でした。

成果

あいにくの天気でしたが予定していた川あそび、川の生物とのふれあい活動を通して、楽しみながら都会を流れる川にこんなにかくさんの生物が生息していることを知ることができました。また、コミュニケーションが苦手な子が多くいましたが、共に川であそび、共に生物に触れることによって皆が笑顔になり、スタッフと子ども同士の会話が自然ととれるようになり、2回目の図書を楽しむプログラムへとつなげる事ができました。

図書たんけん編

【日時】23年8月27日(日) 9:30～15:30

【場所】札幌龍谷高等学校図書館、札幌市中央図書館
【講師】吉本拓郎さん、青砥愛子さん、安原明宏さん
【スタッフ】保育士・小田嶋有美子さん、看護師・栃久保美紀子さん、科学塾講師・松下真由子さん、札幌龍谷高校2年・小川大翔さん(高校生リーダー)、札幌龍谷高校放送部3人
【参加人数】参加者数14人、スタッフ数11人

午前は、札幌龍谷高校図書館にて「へんな魚と図書かんたんけん」をテーマに活動しました。絵本「海とそらがあうばしょ」「ちがうねん」「スイミー」を大画面に映して読み聞かせ体験からスタートしました。龍谷生3人が読み聞かせを行い、参加者は皆、聞き入っていました。その後、1枚の紙に1人1匹の魚を描き、それをスイミーの絵本と同じように大きな画面に映すと一つの大きな魚となり、何と泳いだしたのであります。

午後は札幌市中央図書館へ移動し、職員から図書館の利用の仕方を学びました。午前のテーマをベースに本を借りるためにどのようにしたらよいか、実際に好みの絵本、図鑑、魚が載っている図書を探し出し、本を借りる事にしました。魚たちを集めて「へんな魚の図鑑」がスクリーンに映し出され、ねこ



社士・前川和正さん、小学校教諭(ポランティア)・川村春花さん
【アシスタント】吉本拓郎さん、青砥愛子さん
【参加人数】参加者16人 スタッフ8人
当日の天気は晴れでしたが、前日の雨で川が増水していたため、川での体験は中止とし、代替プログラムを実施しました。参加者は自然学校発寒に集合し、アイスブレイクとして友達づくりゲーム(ネームトス、パイプライン、フルー



ざかな、深海魚、光る魚」などなど様々な魚を発見することが出来ました。

成果

札幌龍谷高校では、アイスブレイクとして本を楽しみながら探す活動から始めました。絵本の読み聞かせでは、スタッフ含め皆で、大画面に映し出された絵と言葉をイメージをすり合わせながらファンタジーの世界へ誘うことが出来ました。そして、川の活動でスケッチした魚が大画面に登場、絵本スイミーの世界に入り込み、自分が描いた魚が動き出したことで驚き、大画面の中で「自然と絵本」をつなげることができました。龍谷生の若いパワーで小学生のファンタジーを膨らませることが出来ました。札幌市立図書館では司書さんから本の借り方を学び、借りることにより本のイメージ、世界が広がりが自然体験の世界から本の世界へ専門家のサポートを得て誘うことが出来ました。高校の先生、ウェブデザイナー、自然学校のスタッフが生み出した新たな学び世界を子どもたちに提供することができました。



縄文文化や自然豊かな標津湿原に出合える ポー川史跡自然公園。 入園者の安全を守るための環境保全活動。



ポー川公園の花ガイドの作成のための植物調査

事業の目的 (事業の狙い)
標津町に位置する「ポー川史跡自然公園」には、国が指定する天然記念物「標津湿原」があり、また世界最大の数を誇る縄文時代から現在までの、一万年に及ぶ長い間、人類が暮らしてきた堅穴住居郡を確認できる遺跡もあります。また、公園内にはタンチョウ、オジロワシ等の営巣地の他、過去にはシマフクロウも生息していた場所でもあり、さらに希少動植物の生息が多数確認されていることから、手厚い保護を必要とする地域です。また、近年ヒグマの目撃情報が相次いでおり、公園の利用者との不意の遭遇による事故についても危惧されます。これらにより、現在利用されている遊歩道や散策路の危険箇所の雑草処理や、支障となる風倒木を除去し、散策路周辺の見通しを確保することでヒグマとの突然の遭遇を防ぐための対策としました。さらに、公園内に生息する季節ごとの花ガイドを作成し、裏面には散策路の分岐点が明確にわかるよう略図を印刷して、植物散策の入園者が、迷わずに植物観察をできるようにし、今後公園を利用する入園者の安全と「ポー川史跡自然公園」の環境保全活動を継続して行くことを目的として実施しました。

実施主体、実施の様子

NPO 法人自然・文化遺産保存活用ネットは、標津町に在住する町民で組織されており、元公務員・元団体職員・元銀行員・元会社役員・現会社員等多種の経験豊富な人達が、自然環境及び歴史文化遺産の保全・再生と、その価値の普及啓発、標津町が世界に誇れる自然環境と歴史文化遺産に根ざした、持続可能な保全活動に寄与するため活動している組織です。この度

の事業は、ポー川史跡自然公園を管理する標津町教育委員会・「標津町観光ガイド協会」、及び同公園内で活動している「標津の森を守る会」の協力を得て、一般の入園者を受け入れながら、同じ目線で危険箇所の確認や、植物調査を実施し、ポー川公園の花ガイドの作成に至りました。

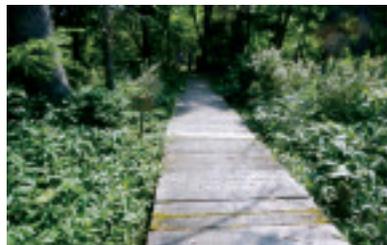
成果・結果、課題・問題点

令和5年度は500部を印刷しましたが、公園の年間入園者の数を考慮すると数の不足が明らかなので、今後は増刷を考えています。その際には記載漏れの植物の調査や、確認が不十分な花について、専門家の意見を聞きながら花写真の追加や、内容の充実を図って行きたいと思っています。

散策路の整備や安全確保については、作業実施後の単年度は安全が確保されていますが、冬期間での風倒木や雑草の成長に伴って状況が変化するので、継続した維持管理が必要であり、今後も本事業で協力をいただいた団体と共同で「管理作業を進めていきたと考えています。



処理前



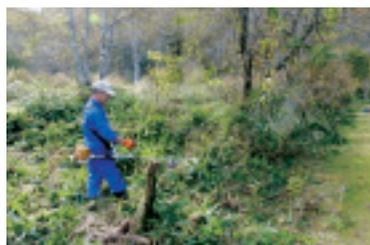
処理後



遊歩道や散策路の危険箇所の雑草・風倒木処理



倒木を除去し、散策路周辺の見通しを確保することでヒグマとの突然の遭遇を防ぐ





本活動は北海道に生息するアマガエルの島嶼個体群の生息記録を残すため、天売島・焼尻島での生息確認を行うことを目的として行ないました。北海道の島嶼部では、利尻島・焼尻島・天売島・奥尻島・国後島にアマガエルが生息しているとされていますが、利尻島のアマガエルについては2021年に本助成を受けて目視調査・音声調査を行ったが確認することができ

ず、現在も確認できないままです。現在は調査の実現可能な天売島・焼尻島を対象に調査を行うこととしました。23年7月末〜8月初旬にかけて、天売島に入島しての直接観察、音声調査を行いました。焼尻島には8月頭に北海道を襲った台風の影響で渡ることができなくなったため、今回は調査を断念しました。天売島の調査では、アマガエルの

集団合唱を記録することができましたが、台風による暴風雨とその後も続いた荒天のため、アマガエルが生息すると考えられる小川や池に近づくことができず、目視による観察を行うことができませんでした。島の住民への聞き取りを行ったところ、アマガエルは普通に生息しており、本年も目撃したというかなり有力な情報がいくつも得られました。また、鳴き声に

ついて聞くことはできただため、天売島には今もアマガエルが生息しているものと考えられます。本調査ではアマガエルの目視がかなわず非常に残念ではありますが、鳴き声から生息地を確認できたため、次年度以降、同所にて目視を試みたいと考えています。



直接観察や音声調査で試みた アマガエルの島嶼個体群の生息調査

にあるが、動物福祉の考慮が餌の入手に影響を及ぼしつつあるため、地域の野生動物の利用は、動物園の持続可能な運営にとっても重要であると指摘しました。坪松耕太氏(札幌市円山動物園)は、動物の行動や健康への良い影響がみられるため、屠体給餌は動物福祉に寄与するが、定期的な実施のためには屠体の入手が課題となると指摘しました。坂村武氏(北海道野生動物対策課)は、エゾシカの個体数管

理と有効活用の促進を行ってきましたが、年間10万頭は未利用であり、運搬費用も課題となると指摘しました。石崎英治氏(北海道食美楽)は、屠体給餌は未利用個体の活用、利用個体の単価上昇及び社会貢献としての意義があるが、価格及び製造プロセスと設備投資が課題であると指摘し、切石亮太氏(北洋銀行)は経済、環境、社会の視点でバランスよくとらえ、サプライチェーン全体の持続性を確保する

ことが重要であると指摘しました。パネルディスカッションには小菅正夫氏(札幌市環境局参事)も参加し、衛生基準の捉え方、捕殺及び運搬方法、費用負担と信頼関係の重要性等について活発な議論が行われました。屠体給餌の実施体制の確立には市民の理解と支援が不可欠であるため、ワークショップの動画及び報告書は広く公開します。



会場前に掲示したポスター

近年、獣害対策として捕獲された野生動物の屠体の有効活用と、動物園で飼育されている動物の動物福祉の向上という二つの課題をつなぐ新たな教育啓発プログラムとして、捕獲された野生動物を用いた屠体給餌への関心が高まっています。屠体給餌とは、捕殺したシカ、イノシシなどの野生動物を毛皮や骨が付いた状態で動物園の動物に与える給餌方法を指し、17年以降、日本各地で試行され、豊橋総合動物公園では定期的に給餌を実施する体制が確立しています。

北海道においてもエゾシカの捕獲頭数が増加し、屠体の有効活用が課題となっています。一方、札幌市は22年、動物園条例を制定し、良好な動物福祉の実現を動物園の責務と位置づけ、屠体給餌を行ってききましたが、道内ではエゾシカの捕獲個体を適切に処理し、動物園へ供給する体制は確立していません。そこで、本ワークショップでは、捕獲された野生動物を用いた屠体給餌を導入し、その研究を推進してきたWild meat Zoo 関係者のお話を伺うと共に、道内の関係者が参加し、北海道の動物園がエゾシカを用いて屠体給餌を行うことの意味と課題を多角的に検討しました。柴田園長の開会挨拶の後、細谷忠嗣氏(日本大学生物資源科学部/Wild meat Zoo)は、野生動物の捕獲数の増大に伴う有効活用の必要性と、動物園における良好な動物福祉の実現をつなぐ点に、この取り組みの意義があるとして、寄生虫、病原性ウイルス、細菌類への対処として、ハイリスクの部位を除去し、凍結及び低温加熱を行う処理方法を説明しました。伴和幸氏(豊橋総合動物公園/Wild meat Zoo)は、屠体給餌の第一の意義は環境教育

アニマルウェルフェア(動物福祉)の 取り組みのひとつ 屠体給餌を考える。

ワークショップ開催
主催：札幌市円山動物園、日本大学生物資源科学部細谷研究室 / Wild meat Zoo、酪農学園大学
日時：2023年6月25日(日) 13:00～16:00
場所：札幌市円山動物園・科学館ホール ※午前中にアムールトラとハイエナへの屠体給餌を実施した。

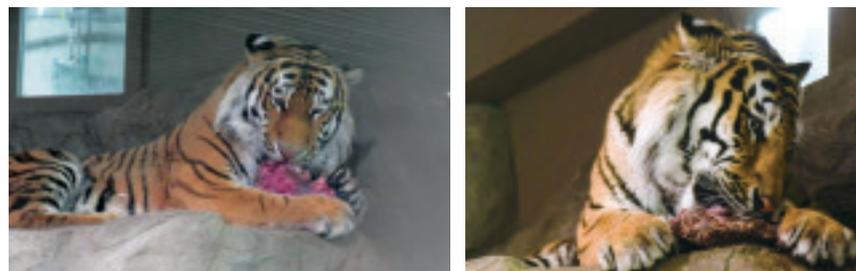
札幌市は22年、動物園条例を制定し、良好な動物福祉の実現を動物園の責務と位置づけ、屠体給餌を行ってききましたが、道内ではエゾシカの捕獲個体を適切に処理し、動物園へ供給する体制は確立していません。そこで、本ワークショップでは、捕獲された野生動物を用いた屠体給餌を導入し、その研究を推進してきたWild meat Zoo 関係者のお話を伺うと共に、道内の関係者が参加し、北海道の動物園がエゾシカを用いて屠体給餌を行うことの意味と課題を多角的に検討しました。柴田園長の開会挨拶の後、細谷忠嗣氏(日本大学生物資源科学部/Wild meat Zoo)は、野生動物の捕獲数の増大に伴う有効活用の必要性と、動物園における良好な動物福祉の実現をつなぐ点に、この取り組みの意義があるとして、寄生虫、病原性ウイルス、細菌類への対処として、ハイリスクの部位を除去し、凍結及び低温加熱を行う処理方法を説明しました。伴和幸氏(豊橋総合動物公園/Wild meat Zoo)は、屠体給餌の第一の意義は環境教育



パネルディスカッションの様子 (円山動物園科学館ホール)



アムールトラの獣舎の前で、パネルを用いて獣害問題について説明する動物園職員



シカの屠体を食べるアムールトラのトート (酪農学園大学環境共生学類学生 岩崎弘明氏撮影。2023年6月25日)





「タンチョウとの共生」目指し、道央圏の行動把握に挑む

近年、道央圏に生息域を広げている特別天然記念物のタンチョウ。環境省は、道東に集中するタンチョウの分散化行動計画を策定し、冬の給餌量を調整するなどしています。タンチョウの自然分散は確かに進んでいるように見えますが、農業など生産活動とのあつれきも報告されているなか、今後、新天

地で生活するタンチョウとどうつきあうか。「タンチョウとの共生」を考えるには、タンチョウが新天地でどのような生活をしていくのか、その行動を把握することが大切です。

そんな思いから「道央圏のタンチョウ飛来状況の把握と飛来情報集約」を活動目標に掲げ、札幌市と北広島市に住む3人（深沢博、佐藤ひろみ、河野潤）で2023年3月に結成したのが「道央圏タンチョウ見つけ隊」です。道央圏へのタンチョウの飛来状況を把握するとともに、その動向をできる限り自分たちの目で確認し、データを蓄積することによって、タンチョウの保全やタンチョウとの共生に向けて取り組む皆さまのお役に立てればと、1年を通して活動し、その結果を報告会（1月27日）で発表しました。報告書にまとめ、120部印刷し、関係各機関や協力していただいた方々に配布しています。

私たちは昨年道央圏のタンチョウ観察を始めたわけではありませんが、3人それぞれ、専門とする分野は異なりますが、タンチョウが道央圏に姿を見せ始めてから、その動向を観察、記録してきました。10年代初めからむかわ町周辺での繁殖を見守ってきた「ネイチャー研究会むかわ」の皆さん、

舞鶴遊水地で繁殖を始めた20年以前から活動する長沼町の「舞鶴遊水地にタンチョウを呼び戻す会」のメンバー、一般社団法人タンチョウ研究所の研究者たちとも連携し、情報を共有してきました。23年度は北海道新聞野生生物基金の助成を受けられることになり、より一層連携を強化し、情報収集及び観察頻度をさらに高めました。若鳥たちが分散して行動する春にはほぼ連日、繁殖期は慎重に、幼鳥が飛べるようになって親子で行動圏を広げる秋、越冬地への移動を見定める12月にはほぼ連日のように出動し、1月以降は越冬地確認のために日高地方を行動するなどの活動を展開しました。

その結果、23年度は、道央圏で7つがいの繁殖行動が確認され、うち5つがいが計6羽の子育てに成功し、少なくとも26羽のタンチョウが道央圏の空を舞ったことが確認されました。そして、そのほとんどが東胆振や日高西部の不凍河



8月、エスコンフィールドをバックに飛ぶ東の里ペア。繁殖に失敗した後も越冬地へ飛去する12月まで東の里、北島両遊水地周辺で暮らし続けた



8月、苫小牧市で確認された親子3羽。初繁殖ペアと見られ、9月以降は厚真川周辺で暮らし、「厚真川親子」と呼ばれた



9月、飛ぶむかわ親子。再産卵による子育てで、飛べるようになったのは遅かった幼鳥も無事飛べるように

川流域などで越冬したことも確認できました。22年度は繁殖成功4つが、飛べるまで育った幼鳥は2羽でした。「道央圏で暮らすタンチョウは年々増えている」ことを実感できた1年でした。

繁殖と換羽を中心に佐藤が、東の里遊水地に絞って活用とその将来について、地元北広島市民の河野が報告しました。タンチョウとの共生への一助となれば、この思いを込めて。なお、道央圏のとらえ方は様々ありますが、私たちは「石狩、後志北部、南空知、東胆振、日高西部」と捉え、報告しました。

一時は絶滅を伝えられた北海道のタンチョウですが、道東から道北へ、そして道央圏へと生息域を広げ、近年の北海道のタンチョウ生息数は1800〜1900羽（タンチョウ保護研究グループの冬期確認調査）といわれています。



9月、飛べるようになった幼鳥を連れて舞鶴遊水地から出た採餌する舞鶴親子



9月、2羽の幼鳥を連れて千歳市の根志越遊水地周辺に現れた318親子。足環318が装着されたオス（右）は2017年、むかわ周辺生まれ。道央圏で初めて...根志越出現だ



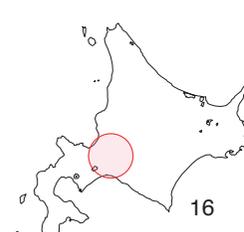
報告会の様子

さらに、千歳川流域6市町に完成した千歳川遊水地群（江別太（江別市）、晩翠（南幌町）、東の里（北広島市）、北島（恵庭市）、舞鶴（長沼町）、根志越（千歳市））が、タンチョウにとっていかに重要であるかを再確認しました。「タンチョウも住めるまちづくり」を進める長沼町の舞鶴遊水地では20年から4年連続子育てに成功し、東の里、北島の両遊水地では23年、結局は失敗したもの、いずれも道央圏生まれ（推定）の若いペアが初繁殖にトライしました。ほかの遊水地でもタンチョウがねぐらとして、あるいは餌場として利用していたことも確認できました。遊水地群の利活用の在り方が今後の道央圏へのタンチョウの広がりに重要な意味を持つものと確信した1年でもありました。

24年はタンチョウ「再発見」から100年。100年前に「再発見」された10数羽から100倍以上増えた計算になりますが、道央圏ではまだ20数羽を数えたばかり。全体の2%にも満たない数です。江戸末期、アイヌ語由来の地名から「千歳」に変わったのもツルがたぐさんいだからとされ、長沼町舞鶴も釣りがたくさん舞っていたから。舞鶴地区には「繁殖橋」という橋もあります。むかわに始まり、遊水地のおかげもあって道央圏に「戻ってきた」ともいえるタンチョウ

ウですが、手放しでは喜ばません。むかわ町周辺に定着したペアが、17年と21年に営巣し、幼鳥を育てあげた厚真町の湿地にいま、風力発電所の建設計画があり、手続きが進んでいます。また、長沼町を除く千歳川遊水地群を市町域内に持つ自治体は、今後どのように「タンチョウと共生」したらいいか、まだ目標が定まっていらないように見受けられます。私たちのつたない報告が、「タンチョウとの共生」に向けたこれからの取り組みの一助になれば、と願っています。

助成いただいた北海道新聞野生生物基金はもとより、情報の共有、タンチョウの生態などについてご教示いただいた一般社団法人タンチョウ研究所の正富宏之氏、正富欣之氏、むかわタンチョウ見守り隊がなぐまタンチョウ見守り隊の皆さまはじめ、ご協力いただいた多くの皆様から感謝申し上げます。私たちはこれからも「タンチョウとの共生」を目指して活動してゆきたいと思っています。皆様のご協力、よろしく願います。（文責 深沢）





第2 清丸別川湿原で調査中

別海町は海岸部に二つのラムサール条約登録湿地(野付湾、風蓮湖)を擁する一方、内陸部の湿地は、西別ヤチカンバ湿原以外は保全の対象外です。町中心部の別海地区で市街地や牧草地に隣接して散在する多数の湿原の実態は、明らかにされてきませんでした。2021年、別海市街地に隣接する宮舞町湿原でムセンズゲ(環境省RDB絶滅危惧Ⅱ類)の自生地が、埋め立てで消滅の危機に瀕していることが判明しました。別海地区の他の湿原を開発による消滅の危機から救うには、暫定的で簡易ながらも湿原の調査と実態把握が最優先であると考えています。

別海町別海地区の空中写真判読で42カ所・756ha(西別ヤチカンバ湿原を含む)の湿原を確認し、そのうち未調査で、面積が大きく、環境の劣化の度合いが少ない湿原を優先的な調査対象としました。対象地区内での調査は22年4月末から23年7月にかけて実施し、14カ所の湿原を調査しました。加えて、別海町内他地区の湿原10カ所、標準津町内の湿原2カ所、浜中町内の湿原1カ所を比較対象として調査し、特徴的な植物や絶滅危惧種は標本を採取しました。

今回の調査で、主要な湿原の植物の分類群数の暫定的な下限が明らかとなり、横断的な比較を可能にするという目的は十分に達成できたと考えています。とりわけ、カンチズゲ(絶滅危惧ⅠB類)が13カ所、ムセンズゲが11カ所、ハナタネツケバナ(絶滅危惧ⅠB類)が1カ所(浜中町姉別)で見られるなど、絶滅危惧種の保護や道東地域の自然保護を考えるに際して、調査対象の湿原が無視すべからざる存在であることが明らかとなりました。

湿原を守るために始めた 保全対象外地区の植物の実態把握調査。

別海町は海岸部に二つのラムサール条約登録湿地(野付湾、風蓮湖)を擁する一方、内陸部の湿地は、西別ヤチカンバ湿原以外は保全の対象外です。町中心部の別海地区で市街地や牧草地に隣接して散在する多数の湿原の実態は、明らかにされてきませんでした。2021年、別海市街地に隣接する宮舞町湿原でムセンズゲ(環境省RDB絶滅危惧Ⅱ類)の自生地が、埋め立てで消滅の危機に瀕していることが判明しました。別海地区の他の湿原を開発による消滅の危機から救うには、暫定的で簡易ながらも湿原の調査と実態把握が最優先であると考えています。

別海町別海地区の空中写真判読で42カ所・756ha(西別ヤチカンバ湿原を含む)の湿原を確認し、そのうち未調査で、面積が大きく、環境の劣化の度合いが少ない湿原を優先的な調査対象としました。対象地区内での調査は22年4月末から23年7月にかけて実施し、14カ所の湿原を調査しました。加えて、別海町内他地区の湿原10カ所、標準津町内の湿原2カ所、浜中町内の湿原1カ所を比較対象として調査し、特徴的な植物や絶滅危惧種は標本を採取しました。

今回の調査で、主要な湿原の植物の分類群数の暫定的な下限が明らかとなり、横断的な比較を可能にするという目的は十分に達成できたと考えています。とりわけ、カンチズゲ(絶滅危惧ⅠB類)が13カ所、ムセンズゲが11カ所、ハナタネツケバナ(絶滅危惧ⅠB類)が1カ所(浜中町姉別)で見られるなど、絶滅危惧種の保護や道東地域の自然保護を考えるに際して、調査対象の湿原が無視すべからざる存在であることが明らかとなりました。



ヤチハンノキの伐採と抜根で、ミズゴケが定植できる生育環境を。 乾燥化から湿原を守る取り組み。

幌向湿原の一端である南幌町保有幌向原野地の乾燥化の要因となっているヤチハンノキを伐採、抜根後整地しミズゴケを定植できる生育環境を整え、当地が湿原環境学習の場として活用できるように土台を構築します。

6月〜8月期に干ばつと高温が続いたため、ミズゴケが移植後のストレスに耐え切れずと判断し、予定していたミズゴケの一部のみを11月14日に移植し、2024年4月下旬に残りのミズゴケを移植しました。

べント「湿原再生の喜び」にて湿原を巡りフットパスを開催、当地に足を運びました。当地にて幌向湿原の歴史と当地の現状、今回の事業内容に参加者34名に説明しました。

地され、優位になかった湿生植物が芽を出すかもしれません。また、さまざまな植物導入を検討し、湿原環境の変遷を知ることができ環境学習の土台を構築することができました。24年以降のミズゴケの定着を期待します。23年は干ばつ、高温と湿原環境にとっては厳しい1年でありましたが、ミズゴケを土台とする湿生植物群落の一部をどうにか守ることができました。環境再生は一朝一夕で成果がでるものではないので、自然環境と向き合いながら今後も毎年手を加えて保全・保護に努めていきたいと考えています。

実施内容 当地の乾燥化の原因となっているヤチハンノキが密生しているエリアの8本の伐採及び抜根して整地作業を行いました。このエリアにはカキツバタの群落が隣接していますが、乾燥化を抑制し群落を保護することに加え、倒木の恐れのある樹木があること、抜根後の穴を利用して保水性の地形を拡大すること、これらを踏まえて伐採するエリアを選定しました。

実施スケジュール 5/24〜26 ヤチハンノキ伐採・抜根・整地作業 6/22、7/14、8/30、9/26 草刈り作業 10/14 湿原再生の喜び(当法人主催イベント) 11/14 ミズゴケ移植(一部) 令和6年4月下旬 ミズゴケ移植

事業成果 乾燥化の大きな要因となっているヤチハンノキの除去ができたことで、湿原環境が大きく変化していくことが期待できます。こういった大掛かりな土木工事はコストがかかり中々できることではありませんが、今回の事業は当地の環境基盤構築に大きな成長をもたらすし、土木作業により泥炭地層が整

土木作業中の状況 土木作業後の状況 移植用ミズゴケと移植後の様子





絶滅危惧種ウミスズメの希少な繁殖地の保全のため、天売島で実施した海上スポットライトセンサスによる生息状況の調査。

事業の目的

北海道北西部に位置する天売島は、8種類約100万羽の海鳥が繁殖のために飛来する重要な海鳥繁殖地です。その中でもウミスズメは環境省RL2020で絶滅危惧ⅠA類に選定され、国内では安定して繁殖が確認されている場所です。しかし、天売島で繁殖する海鳥の多くは環境の変化や人為的



ウミスズメのカウント調査

な影響、捕食などにより生息数が減少しており、ウミスズメについても生息数の減少が危惧されています。そのため継続的に個体数のカウントを実施することで、経年的な個体数変化を把握することは、保護措置を検討する上で非常に重要となります。またウミスズメ類は陸上哺乳類がいない、もしくは接近できないような離島や崖で繁殖するため、人為的に持ち込まれた陸上からの捕食者に対して非常に脆弱であると報告されています。天売島においてはドブネズミが多数生息していますが、ウミスズメにどの程度影響を及ぼしているかは明らかとなっておりません。

そのため本事業では、ウミスズメの保全に向けて継続的に生息状況を把握し、捕食者の及ぼす影響を明らかにすることを目的として、ウミスズメの繁殖期における夜間の海上スポットライトセンサスを実施しました。それに加えて捕食者の影響把握調査についても実施しました。さらに、ウミスズメ保



普及啓発のための報告会

護の一助とするために、調査結果を地域の方を対象に報告し普及啓発を実施しました。

実施主体

北海道海鳥センター友の会

当団体は北海道海鳥センターと連携・協力し、自然観察会や環境教育などの普及啓発活動、海鳥の調査、海岸清掃など様々な活動を実施することにより、北海道海鳥センターの運営をサポートし、自然環境を保全することを活動目的としています。

成果・結果

23年度の調査は、霧などがなく、波も50cm以下の天候が安定した日

に島入りして実施した結果、ウミスズメは203羽確認することができました。調査は天候や波の状況に左右されるため、1シーズン中に2〜3回実施することが望ましく、今回は海上スポットライトセンサスを2回実施することができたため、データを収集すること



ができました。また、23年度に実施した捕食者が及ぼす影響把握調査においては、センサーカメラで

は、ドブネズミは確認されませんでした。また、GPSロガー装着やイヤータグによる動態調査ではドブネズミを再捕獲することができなかつたため、今後は捕獲数を増やすなど手法について再検討する必要がありますと考えられました。また11月には地域住民の方を対

象に調査結果の報告会を実施しました。10名ほど参加し、「非常に勉強になった」「海鳥のために今後どんなことができるか考えていきたい」などの意見をいただくことができました。今後もウミスズメの保全に向けた普及啓発を行っていきたいと思います。

都市において最も身近な野鳥の一種カラス。共存するためのマニュアルの制作と配布。

事業の狙い

当会は2017年からカラス対応マニュアルを作成しており、当初は自治体向けでしたが、広く一般にも配布しています。身近なカラスを理解してもらい、より良い共存を目指せるように活用していただけたらと思います。

身近な野鳥であるカラスとの共存・カラス対応マニュアル
北海道版2023改訂

この冊子は、自治体担当部署への配布を目的に、当会に寄せられた相談や調査記録に基づく内容を

中心に作成していました。しかし、市民などからの希望も多く、現在は無料で配布し、施設などへも設置してもらっています。

カラスの相談は全国から多数ありますが、3月下旬から7月中旬にかけてが最も多く、そのほとんどが「繁殖期のカラスの行動」や「保

護」に関するものです。これから迎える繁殖期に自治体等や市民のカラス対応の参考にして頂けると、より良い共存が可能になると考えています。

カラスパンフレット

マニュアル同様に、簡単ではありますがカラスの生態などを記載



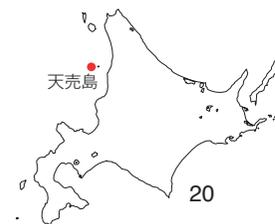
パンフレット



カラス対応マニュアル



クリアファイル



ご支援ありがとうございます。

公益財団法人北海道新聞野生生物基金はたくさんの企業の皆さま、たくさんの人々に支えられています。毎月必ず寄付をしてくれる人、定期的に寄付をしてくれる人、何かの記念日に寄付をしてくれる人、ナキウサギを守って下さいと寄付してくれる人、毎年、年会費として支えてくれるサポート企業などに支えられています。こういった企業や個人の皆様の「北海道の自然を守りたい」という思いを受け、微力ながら頑張っています。Webからも寄付ができます。皆様のご支援をお待ちしております。

2023年5月～2024年4月に寄付をくださった方々です。他にも掲載を希望されない方々からも寄付をいただいています。

2023年5月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●川崎市、齊藤政彦さんは1万円を●札幌市西区福井1、北海道コンクリート圧送協同組合は2万円を●札幌市西区発寒9の9、環境テクニカルサービスは道新野生生物金制作の「花のエコイラスト百撰」を使用した協賛金として5万円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

6月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●江別市、水島末記さんは5千円を●標津郡中標津町、匿名の方は千円を●旭川市、スズメさんは4千円を●苫小牧市、正木由紀さんは5千円を●札幌市中央区、間瀬達哉さんは1万円を●札幌市南区、梅沢俊さんは2万円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。●札幌市手稲区、柳内風さんは2万円をフクロウ保護のために寄付した。

7月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●江別市、澤澤千代さんは65000円を●旭川市金星町1、国際ソロプチミスト旭川は3万円を●札幌市東区、大淵武雄さんは2千円を●旭川市、匿名の方は5千円を●北海道新聞野生生物基金設立30周年記念展会場の募金箱に集まった2万890円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した

8月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●小樽市、匿名の方は1万円を●旭川市、スズメさんは4千円を●斜里郡小清水町、大出洋子さんは1万円を●札幌市白石区、佐藤研一さんは1万円を●札幌市東区、早坂正さんは1万円を●札幌市北区、堀田雄二さんは2万円を●東京都江東区、山田恭子さんは5千円を●匿名の方は5千円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

9月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●札幌市豊平区、匿名の方は5千円を●札幌市厚別区上野幌3の6、新札幌駅前内科循環器は2万円を●札幌市南区、安部英夫さんは1万円を●札幌市中央区、匿名の方は1万円を●滝川市、匿名の方は1万2500円を●石狩市、笹川孝子さんは1万円を●札幌市厚別区、匿名の方は1万円を●北海道新聞野生生物のネーチャーフォーラム会場の募金箱に集まった1万2502円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

10月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●札幌市南区、梅沢俊さんは2万5千円を●札幌市中央区、堀乙子さんは1万円を●札幌市東区、匿名の方は1万円●札幌市北区、中川明彦さんは1万円を●札幌市中央区、匿名の方は1万円を●旭川市、匿名の方は5千円、スズメさんは4千円を●石狩市、向野文彦さんは1万円を●函館市、匿名の方は3万円を●二海郡八雲町、匿名の方2人はそれぞれ5千円を●瀬棚郡今金町、越野誠さんは4千円を●札幌市中央区北5西4、大丸札幌店はレジ袋の収益金10万9243円を●東京都国分寺市、金子道代さんは2千円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

11月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●札幌市中央区大通西3、道新会札幌八日会は募金に集まった4万4492円を●釧路市、匿名の方は3千円を●北広島市、匿名の方は1万円を●旭川市、匿名の方は5千円を●恵庭市、匿名の方は10万円を●札幌市清田区、鷹坂正明さんは1万円を●札幌市南区、匿名の方は5万円、刈屋宏美さんは2万円を●札幌市中央区大通西3、北海道マソン組織委員会は135万円を●北海道野生生物写真コンテスト作品展会場の募金箱に集まった1470円を●千歳市、後藤孝雄さんは2万円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。●札幌市手稲区、柳内大地さんは2万円をナキウサギ保護のために寄付した。

12月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円、同草加市、島影均さんは5千円を●札幌市中央区、匿名の方2人はそれぞれ1万円、岡希樹さん、匿名の方3人はそれぞれ5千円、匿名の方6人はそれぞれ3千円を●札幌市豊平区、新蔵博雅さんは1万円、大山保友さん、匿名の方はそれぞれ3千円、かわうそ倶楽部は3333円を●札幌市清田区、上ヶ島精一さん、匿名の方はそれぞれ1万円、金江大次さんは5千円、金江久恵さん、金江明彦さんはそれぞれ3千円を●札幌市南区、匿名の方は100万円、奥山博さんは1万円、小堀煌治さん、匿名の方はそれぞれ5千円、匿名の方は3千円を●札幌市白石区、川畑寿美子さんは1万円、トライさんは5千円を●札幌市北区、山田克彦さんは3万円、匿名の方は1万円、石澤昭義さんは5千円を●旭川市、匿名の方は5千円、内坪忠宏さん、匿名の方はそれぞれ3千円を●釧路市、工藤悦子さん、匿名の方2人はそれぞれ5千円、匿名の方は3千円を●札幌市手稲区、高橋義一さんは5千円を●札幌市厚別区、篠島賢行さんは2万円、池野良一さん、匿名の方はそれぞれ5千円を●札幌市西区、匿名の方は5千円を●江別市、匿名の方は3万円を●恵庭市、匿名の方は1万円を●札幌市白石区東札幌2の5、シビテックは自社オリジナルカレンダーの売上金1万4800円を●函館市、山口精次さんは5千円を●亀田郡七飯町、河戸政美さんは5千円を●沙流郡日高町厚真町87、徳田新聞店は1万円を●水戸市、佐藤紘一さんは1万円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を●カドヤエコさんは3千円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

2024年1月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●札幌市中央区、匿名の方は1万円を●札幌市厚別区、戸田幸四郎さんは1万円を●札幌市東区、大原昌宏さんは5千円を●江別市、匿名の方は2万円、伊藤洋子さんは1万円を●函館市五稜郭町31、北海道新聞函館支社は募金箱に集まった1209円を●釧路市、匿名の方は3千円●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

2月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●札幌市厚別区、石岡一臣さんは5千円を●札幌市北区、荒島さんは1万7000円、橋場久美子さんは5千円を●札幌市中央区、匿名の方は1万円を●旭川市、スズメさんは3千円を●標津銀中標津町、匿名の方は千円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

3月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●札幌市中央区北5西2、札幌駅総合開発は募金箱に集まった16万8405円を●札幌市厚別区、匿名の方は1万円を●札幌市南区、匿名の方は1万円を●札幌市中央区北1西3、札幌国際プラザ・札幌コンベンションビューローは2万6000円を●札幌市手稲区、匿名の方は1万円を●オホーツク管内小清水町、大出洋子さんは1万円を●札幌市中央区大通西3、北海道新聞社共栄会は50万円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

4月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円を●札幌市中央区、匿名の方は3千円を●北見市、網野美江子さんは5千円を●釧路市、匿名の方は3千円を●札幌市中央区北5西4、大丸札幌店はレジ袋とオリジナルマイバックの収益金30万円を●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

2024年度事業計画(一部抜粋)

収益事業(特別会計)

一般販売用カレンダー事業

「北海道野生生物写真コンテスト」の応募作品の中から秀作を選び、動物部門の大判吊り下げ型カレンダー、中判の中吊りカレンダーおよび植物部門の卓上型カレンダーを制作し、当基金や書店などを通じて北海道の野生生物を守る目的と願いを込め販売している。道内外で根強い人気があり、2025年版カレンダーも引き続き収入の柱とする。販売価格はいずれも税込みで、吊り下げタイプ 1500 円、中綴じタイプ 1200 円、卓上タイプ 1000 円として、販売数の増加を目指す。

公益目的事業(一般会計)

【普及啓蒙事業】

シンポジウム・フォーラム

2023 年は新型コロナウイルスが 5 類へと移行したこともあって、9 月に植物写真家の梅沢俊さんのネイチャーフォーラム、8 月には基金設立 30 周年記念事業として過去の写真コンテスト入賞作品を使用した基金オリジナルカレンダーの展示とあわせた講演会を開催した。本年度も 7 月～8 月、道内に生息する希少生物の保護や飼育に取り組む動物園の取り組みをテーマにしたネイチャーミニフォーラムの開催を企画している。このほか、野生生物保護、生態系保全などがテーマのイベントの開催を随時支援していく。

【自然体験活動事業】

(1) 環境出前講座

基金の評議員ら自然や環境問題の専門家が学校や地域講座などに出向き、得意分野のテーマで講演している。2023 年度は富良野市の小学校や羅臼高校、知床のホテルで実施した 2024 年度も 2～3 回の開催を目指す。

(2) 環境エクスカージョン

2023 年度は道新観光と組み自然散策と写真撮影を楽しむ知床探訪ツアーを 7 月に計画したが、クマの出没が相次いだ時期であったため参加者が集まらず中止した。2024 年度は再度、同ツアーや、要請があれば自然体験型の事業に対応していく。

(3) モーリーの森づくり

2006 年度から当別町の「道民の森」で植樹を行い、2012 年度からは栗山町から用地を借用し植樹する協定を結び、植樹や種の採取・苗づくりなどを夏に実施してきた。道新こども新聞「まなぶん」の子ども記者らから参加者を募った栗山町での植樹は、コロナ禍のため 2019 年度の開催が最後で、以降は 2022 年度まで保育管理のみ行ってきた。2023 年 3 月末で借用期限を迎えたため、適当な候補地が見つかるまで本事業の中断を余儀なくされたため、保育管理も止める予定であったが、最後の植樹地中心に保育管理を継続する。

【コンテスト事業】

(1) 写真コンテストと写真展

2023 年度は、コロナ禍や応募者の高齢化などが進んだ影響か、応募者が△33 人の 185 人となったため、応募作品数も△17%の 486 点(△98)となったが、作品の質自体は遜色ないものであった。貴重な収入源であるカレンダー事業につながるため、2024 年度も夏に北海道の野生生物を対象とした写真作品を広く募集するコンテストを実施する。撮影マナーの向上を呼び掛けつつ、北海道の大自然の息吹が伝わる写真を審査委員会で選考する。入賞・入選作は北海道新聞紙上やモーリー通信で紹介する。また、写真展は例年通り 11 月に富士フィルムフォトサロン札幌で開催する。

(2) 夏休み自然観察記録コンクール

北海道自然保護協会との共催で、夏休み前に募集の案内を道内小学校に発送し作品を募集する。入賞・佳作を北海道新聞紙上で発表し、優秀作品は道新こども新聞「まなぶん」や「モーリー通信」などで紹介する。

【出版事業】

自然情報誌「モーリー通信」の発行

年 1 回(6～7 月)に発行する。さまざまな野生生物が息づく北海道の生物多様性の保全を考えて展開している各種事業の詳細や、その運営を側面から支えてくれている企業・個人の想い、北海道に生きる野生生物に関連する特集などを掲載している。未来への提言となるよう、北海道の今を伝えていく。

【24 年度助成事業】

自然保護、野生生物保全に頑張っている団体・個人の活動を広く応援している。今年度は、一般 200 万円、別枠の「杉本とき鳥類保護助成基金」100 万円を上限に助成申請を受け付けた。助成先と助成事業は下記の通り。計画実施後に報告書の提出を求め、「モーリー通信」に掲載する。

一般助成 ●十勝管内浦幌町・浦幌ヒグマ調査会「市民による小さなヒグマ対策実施とその先へ向けたステップアップ」45 万円●札幌市・石狩浜ハマナス再生プロジェクト協議会「ハマナスをシンボルとした海辺の生物多様性啓発事業」26 万円●滝川市・たきかわ環境フォーラム「野生動物と共存する「地域の力」育みプロジェクト」20 万円●後志管内ニセコ町・尻別川の未来を考えるオビラメの会「尻別川のイトウ繁殖地『見まもり隊』活動」20 万円●江別市・国際交流サークル SukaRela「北海道の動物園水族館で取り組まれている絶滅危惧種保全対策を紹介する多言語 WEB サイトと動画サイトの構築による北海道の生物多様性保全の普及啓発と国際交流の推進」33 万円●旭川市・NPO 法人癒しの森づくり「森の課外授業」10 万円
鳥類保護助成 ●札幌市・特定非営利活動法人 EnVision 環境保全事務所「市民による鳥の分布情報収集・共有・利用の仕組み作り」50 万円

その他の事業(一般会計)

(1) バンフレットなどの作成

リーフレットなど、新たな配布用として追加印刷をする。

(2) ホームページの維持・更新

基金の活動を広く宣伝・紹介するほか、助成事業や写真コンテストの応募用紙のダウンロードなど、事業の推進にも役立つ。

(3) Web 寄付決済手数料

Web 上での寄付は、寄付金クラウドサービス「Syncable(シンカブル)」を導入する。費用は、このサービス利用料。

公益財団法人北海道新聞野生生物基金では **サポート企業を募集しています。**

※サポート企業は年会費が1口3万円で、お申込み口数に上限はございません

※北海道の大自然や野生生物の保護に興味や関心がある企業様・個人様のお申し込みをお待ちしております。

●お問い合わせ・お申し込み:公益財団法人北海道新聞野生生物基金

TEL 011-210-5773 FAX 011-210-5774 Email nature@hokkaido-np.co.jp

サポート企業一覧 ※掲載は申込順(2024年5月現在26企業・個人)

カネカ北海道 (札幌市)	諏訪・高橋法律事務所 (札幌市)	運河の宿 おたる ふる川 (小樽市)	北海道コカ・コーラ ボトリング (札幌市)
新倉吉晴 (小樽市)	北海製罐小樽工場 (小樽市)	ツルハ (札幌市)	函館軟式野球連盟 (函館市)
北海道新聞 HotMedia (札幌市)	アイワード (札幌市)	ウヤマエンジニアリング (札幌市)	きんでん北海道支社 (札幌市)
孝仁会 (釧路市)	道新アクセス (札幌市)	網走信用金庫 (網走市)	道新総合印刷 (北広島市)
遠軽信用金庫 (遠軽町)	日本ハム (大阪府)	登別温泉ケーブル (札幌市)	太田硝子店 (旭川市)
セコマ (札幌市)	道新文化事業社 (札幌市)	エフエム北海道 (札幌市)	道新販売センター (札幌市)
道新サービスセンター (札幌市)	ほくしん (砂川市)		

道南地域の軟式野球の発展と

地域の生涯スポーツの一環として行政と共に活動

函館軟式野球連盟

学童・少年(中学生)・朝野球・シニアなど
 各大会を運営しています。

(連盟事務所)
 〒040-0031 北海道函館市上新川町(新川球場本部)
 TEL 0138-40-8811

北海道野生生物 写真コンテスト 〈入賞作品〉

第29回北海道野生生物写真コンテストの入賞・入選作32点が決まった。公益財団法人北海道新聞野生生物基金と北海道新聞社の主催。応募者の総数は185人（前年比33人減）で、動物部門389点、植物部門97点の計486点（同98点減）の応募があった。動物部門1席には函館市の丹保聡さんの「仲良く半分こ」が、植物部門1席には帯広市の出口博司さんの「湿原の春」がそれぞれ選ばれた。また、全応募作品の中から、同基金オリジナルカレンダー2025年版の動物編13点、植物編13点選ばれた。入賞作11点と優秀作21点は11月3日から8日まで、富士フィルムフォトサロン札幌（札幌市中央区大通西6）で展示された。

◇審査委員（敬称略） 寺沢孝毅（動物部門審査委員長）、奥田実（植物部門審査委員長）、小川巖、中井和子、西村昌晃、三浦高広

動物部門講評（寺沢）

1席の「仲良く半分こ」は、ハヤブサを捉えた作品だ。警戒心が強い猛禽類の生態を、

正面からシャープに、しかもつがいの2羽がバランスよく写し取られている。捕らえた獲物を共有することで絆を深め合う貴重なつがいの行動を、高い完成度で記録した優秀な作品である。

2席の「レース模様のゴンドラ」は、水面に映り込む葉脈やトンボの羽に着目し、それをレースのゴンドラに見立てた作者のセンスが素晴らしい。面白さを発見する目と、1枚の絵にできた表現力に評価が集まった。「仲よし家族」は、子リスたちがぐるりと樹幹に輪になっていて、引越しのなか、日向ぼっこなかと思わず想像してしまう。見る人の心を温かくする作品である。

3席の「アイタタタ！」および「まんまるマウス」は、被写体になることが少ない野生生物に目を向けたこと、目を引く行動や姿の面白さがうまく表現できたこと等が評価された。「厳寒の朝」は、北海道の凍てつく朝に起きてくる出来事を、キタキツネとオオハクチョウの緊張する出会いをテーマに美しく切り取ることができた。

鮫島和子賞の「スマイル」は、ハリオアマツバメの水飲み行動を切り取ったものだ。鳥類の中でも最速で飛翔する種の一つで、真正面からピタリと動きを止められたのは見事である。この一瞬前の、口を開けて水を飲む瞬間も見えてみたい。

植物部門講評（奥田）
応募作品の特徴の1つは同一撮影地の被写体の重複が多々あり、入選の要は撮影時の画面構成はいうまでもなく、光や背景など、小道具の効果的な使い方が鍵になる。

1席の「湿原の春」は、早春のヤチボウズとミズバショウを捉えた作品である。画面構成や臨場感を左右する背景の使い方が巧みだ。なにげない背景の樹木が視線を安定させ、過去に選ばれた同一テーマを撮る難しさを克服した。

2席の「着氷」は、秋色を帯びた野草（イネ科シバ属の仲間だろうか？）が凍りついた写真である。着氷することで普段目にする野草の想像を超えた世界を見せてくれた。ただ、自生する情景が背景に描写されれば更に力強さが増した。

3席の「水辺のステージ」は、水辺の枯れた樹木と湖沼に自生するエゾノミズタデを捉えた作品である。死と生である。背景中央の2本の樹木の強さが画面の力を弱めていることが残念だ。撮影位置を工夫するか、主役を引き出す強い光線が欲しい。

鮫島和子賞の「クリンソウ咲く」は、鮮やかに開花した水辺のクリンソウを捉えている。満開を迎えた鮮やかな花の赤と濃い葉の緑色が黒い水面のなかにシンメトリーとなって浮き上がる力強い作品だ。応募数の多いクリンソウの中でも印象深い。



【動物部門 1席】
仲良く半分こ 丹保 聡（函館市）



【植物部門 1席】
湿原の春 出口博司（帯広市）



【動物部門 3 席】
まんまるマウス 基なつみ (釧路市)



【動物部門 鮫島和子賞】
スマイル 藤本卓哉 (恵庭市)



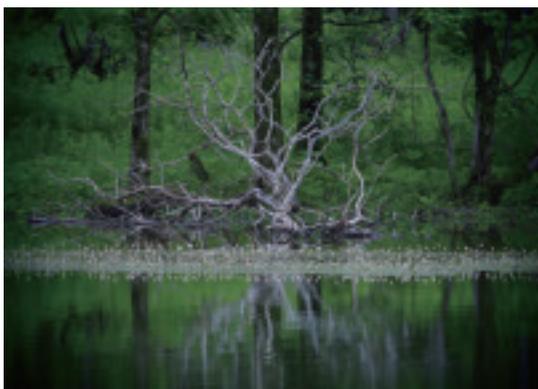
【動物部門 2 席】仲良し家族 川上幸男 (函館市)



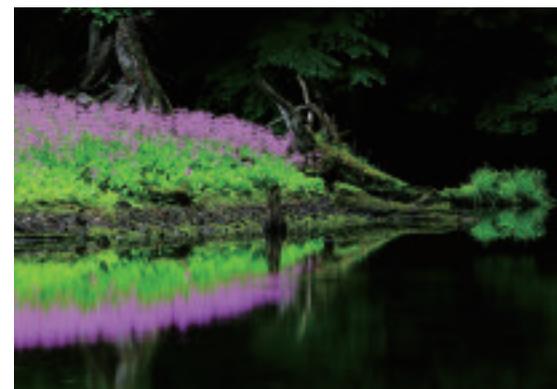
【植物部門 2 席】着氷 竹田啓子 (釧路市)



【動物部門 2 席】レース模様のゴンドラ 松本久子 (美唄市)



【植物部門 3 席】
水辺のステージ 佐々木 洋 (苫小牧市)



【植物部門 鮫島和子賞】
クリンソウ咲く 田澤米子 (帯広市)



【動物部門 3 席】
厳寒の朝 吉村 剛 (千歳市)



【動物部門 3 席】
アイタタタ! 稲垣昌子 (函館市)



水面をすべる
松田哲典 (十勝管内広尾町)



朝陽と北帰行
前田賢一 (宗谷管内豊富町)

【植物部門入選作品】



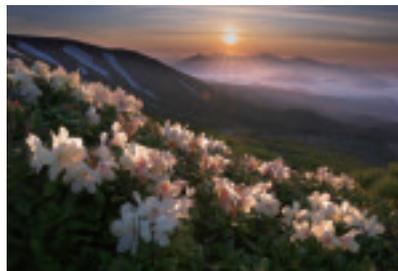
胞子放出 大谷重夫 (苫小牧市)



滝に耐える 古櫛由美 (北斗市)



優しく照らして
中神由美子 (札幌市)



天上にて輝く 横江憲一 (札幌市)



老木に新たな生命
鶴谷省司 (北広島市)



冬の妖精 山内佳子 (札幌市)



終焉の美 相馬秀行 (札幌市)

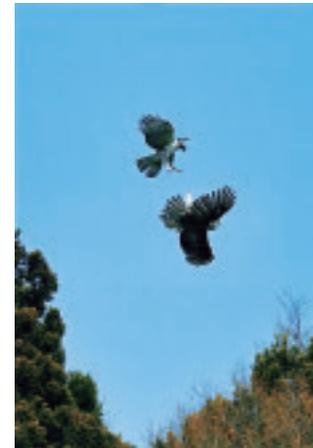


静かに餌を待つ
伊藤文章 (空知管内新十津川町)



エゾリスの食事あと
今泉俊雄 (釧路市)

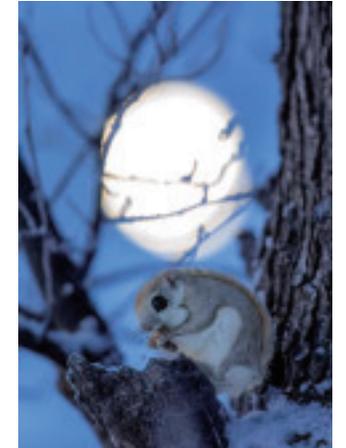
【動物部門入選作品】



ドッグファイト
松崎一朗 (函館市)



突進 佐々木正春 (旭川市)



月光 早川徳幸 (札幌市)



父を慕う 前田敏雄 (恵庭市)



押さないで~!! 丸山照美 (札幌市)



トンボキャッチ
山上隆司 (苫小牧市)



一羽で、2羽
伊藤正司 (札幌市)



採餌 石橋文則 (伊達市)



ジャンプ!! 池の鯉
宮下征治 (札幌市)



モテモテ 岩永雅弘 (札幌市)

第30回夏休み 自然観察記録コンクール

北海道新聞社・北海道新聞野生生物基金・北海道自然保護協会の共催により、北海道教育委員会・札幌市教育委員会の後援を得て、「第30回夏休み自然観察記録コンクール」を開催しました。

入賞作品公開展示は下記の日時・場所で行われました。

2023年10月31日(火)～11月5日(日)
札幌市資料館「2階ミニギャラリー」
2024年1月5日(金)～9日(火)
札幌市円山動物園「円山動物園科学館ホール」

応募状況

- ◎募集テーマ 身のまわりの自然をよく見て
作文や絵にくわしくかいてみよう
- ◎応募数 作品数 32点
- 1年(5) 2年(4) 3年(8) 4年(6) 5年(4) 6年(5)
- ◎学校数 15校
- ◎審査日 23年10月4日(水)
- ◎審査 北海道新聞野生生物基金、北海道自然保護協会

受賞者・受賞作品

- ◎金賞 1点
長内 智幸(札幌市立北陽小学校4年)
「北大で見た春の野鳥」
- ◎銀賞 2点
坂本 雅人(千歳市立みどり台小学校3年)
「なぜチョウはすきなのにかはきらわれるのか?」
- 吉田 美里(網走市立網走小学校4年)
「シラカバについて調べよう」
- ◎銅賞 5点
石井 虎太郎(南幌町立南幌小学校1年)
「ぼくがみつけたむし」
- 小関 悠生(札幌市立信濃小学校2年)
「いきものかんさつ」
- 齊藤 蓮(函館市立中島小学校3年)
「サンショウウオのサバイバル」
- 坂本 颯人(千歳市立みどり台小学校5年)
「昆虫の羽」
- 上村 和啓(伊達市立大滝徳舜暫小学校5年)
「キアゲハの観察記録」
- ◎佳作 8点
橋本 美里(滝川市立滝川第三小学校1年)
「チョウのかんさつ」
- 長谷川 奏(札幌市立藻岩小学校2年)
「クワガタのかんさつ日記」
- 丸山 春翔(札幌市立藻岩小学校3年)
「カナヘビ日記」



【金賞】
長内智幸(札幌市立北陽小学校4年)
「北大で見た春の野鳥」

係もわかりやすくなっています。最後に、同時に円山公園でも行なった観察でもみられた多くの鳥が、街中の北大でも観察できたことから、円山に遠くへ行けない人たちにも気軽にできる北大での野鳥観察をしてみても呼びかけています。

【銀賞】「なぜチョウはすきなのにかはきらわれるのか?」

坂本雅人さんは、チョウとガは、見た目は似ているのに、どうしてチョウはみんな楽しく追いかけて、ガを見たら逃げようとするのか気になり、チョウとガの違いを調べることに

しました。それぞれをどのように思っているのかインタビュー。種類数、形や色、活動の違い、生育までの様子を比較し、スケッチも入れ、ファイルにまとめました。結論として、ガには毒のあるものもいることや、動きが激しいこともあって嫌われるのがわかる気がしたとのこと。ただ、サナギから糸もとれるものもいて、嫌わないでほしいとまとめました。調べるきっかけから調査の仕方、結果、考察の流れでしっかりとまとめられていました。

【銀賞】「シラカバについて調べよう」

吉田美里さんは、白くて北海道らしいシラ

藤山 結月(札幌市立藻岩小学校3年)

「黒曜石について」

大江 陽向(帯広市立啓北小学校3年)

「二ホンザリガニをまもれ!!」

太田 彩萌(札幌市立藻岩小学校5年)

「エナガとシマエナガについて」

松岡 昇(伊達市立伊達小学校6年)

「オオサンショウウオとエゾサンショウウオの意外な違い」

今川 空哉(札幌市立藻岩小学校6年)

「雲の種類について」

◎学校賞 札幌市立藻岩小学校

金・銀・銅受賞作品の講評

審査委員長

一般社団法人北海道自然保護協会 常務理事

横山武彦

【金賞】「北大で見た春の野鳥」

鳥の好きな長内智幸さんは、4月に北大構内で行われた探鳥会に参加し、観察結果を1枚のポスターにまとめました。観察できた27種の野鳥はそれぞれに番号をつけ、留鳥・夏鳥・冬鳥に色分けしたシールで、北大のどこで観察したか構内図に表示されています。また、それぞれの鳥について、説明が簡潔に書かれた10cm角の色紙も構内図を囲むように貼られています。構内図には池や森、草地、小川などのイラストもあり観察できた鳥との関

カバの木が大好き。新聞で、曲がりやすく利用価値が低いとされていることを知り、もっと価値が上がるように調べることにしました。樹液をとるところを見学したり、樹皮が焚き付けに使われることや、樹皮でのカゴ作り、葉を乾かしてお茶を作り、樹皮・枝・葉



【銀賞】
坂本雅人(千歳市立みどり台小学校3年)
「なぜチョウはすきなのにかはきらわれるのか?」

特集

もっと知ろう 動物園

動物園の自然保護活動

動物園や水族館の役割のひとつに「種の保存」があります。希少な動物たちの保護や生態の調査・自然環境の保全など、生物学に基づいた飼育や繁殖といった動物園や水族館ならではの方法で行われています。道内の動物園の知られざる地道な生物多様性への取り組みを紹介します。

手のひらサイズの小さな命 トガリネズミと ニホンザリガニの 保護活動 札幌市円山動物園

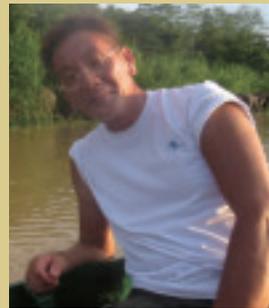
一時は絶滅も危ぶまれた タンチョウの 保護活動 釧路市動物園



全道 8 園館の動物園と水族館の協力で
動き出した、生物多様性への取り組み

北海道産いきもの 保全プロジェクト

旭川市旭山動物園
坂東統括園長からの
レポート



を煮た液での草木染めなど、実際に体験してみました。「木育」のイベントにも参加して、シラカバについて葉や枝のくわしい観察、森や木と動物・鳥・虫、自然との関係も学び、フィールドにまともポスターにしました。白樺は外国や北方民族、アイヌの人たちもさまざまな活用されていることを知り、もっと活用してほしいとまともめています。

【銅賞】
「ほくがみつけたむし」
石井虎太郎さんは、ミヤマクワガタのオスとメスを、クワガタムシのメスをスケッチし、ハサミやツノの形の特徴や大きさ、ハサミで挟まれた時の強さなどの違いを書きました。ノコギリクワガタの飼育の様子や3令幼虫までの変化もスケッチし、1枚のポスターにまともめました。そこに描かれたスケッチと説明

文をみると、クワガタムシやカブトムシを興味深く観察・飼育していた様子が目に浮かびます。

「いきものかんさつ」
小関悠生さんはバッタとダンゴムシを採集し飼育、その生態を観察しました。ミニトマトの収穫についての記録とともに絵日記にしました。バッタは霧吹きで水を与えているとき、壁につかまって口を開けて水を飲み、草を食べるときは足で草を掴んで食べていたこと。土の中に卵を産んでいるところも観察できました。ダンゴムシの赤ちゃんが、たくさん集まって枯れ葉を筋の部分を残して食べることも新たな気づきでした。

「サンショウウオのサバイバル」
斉藤蓮さんは卵から飼育し始めたエゾサンショウウオが共食いをしたことから、共食い

をするものとしないうのものについて成長の違いを観察しました。卵が孵化したときすでに共食いする個体が頭が大きい事がわかりました。共食いするものと共食いしないものを分けて飼育観察した結果、共食いする個体は口も大きく、からだも早く大きく育ち変態、成体となることもわかりました。残酷だと思った共食いも生きるための仕組みとわかりました。

「昆虫の羽」
坂本颯人さんは昆虫の羽が種類によって、形や働きなどがどのように違いがあるかを調べたほか、観察、スケッチなどを行い、ファイルにまともめました。行動の能力や飛び方、餌の取り方と羽の形や大きさも関係していることもわかりました。観察の中から新たに知りたい疑問も生まれてきたとのこと。今後の研究に期待したいと思います。

「キアゲハの観察記録」
上村和啓さんはキアゲハが幼虫・成虫になるまでを観察しました。大きなケース内にセリの葉を入れて2齢・3齢幼虫の成長や変態を観察。その様子を詳しく記録しました。幼虫がフンをするときの様子や、キアゲハの成虫が卵を産むときに羽を震わせていることなども観察できました。夏型のキアゲハが産んだ卵からできた蛹（さなぎ）は越冬して翌春に羽化することも見届け、確かめています。



【銀賞】
吉田美里（網走市立網走小学校4年）
「シラカバについて調べよう」

かつては都市部にも多く生息していた
トガリネズミやニホンザリガニ。
北海道に古くから住み続ける小さな生きものたちが、
忘れ去られないように取り組んできた、
札幌市円山動物園の保護活動。

トガリネズミ

ネズミではなくモグラの仲間

みなさんはトガリネズミという動物をご存じでしょうか。「ネズミ」はよく耳にする動物だと思いますが、「トガリネズミ」という名前の動物を知っている方は少ないと思います。また、実際に見たことがある人は尚のこと少ないのではないのでしょうか。実は、北海道には5種類のトガリネズミが生息しており、札幌市内にも生息しております。トガリネズミは身近な動物ではありませんが、体が小さく見つけるのが非常に難しく、行動、生



円山動物園で飼育のヒメトガリネズミ

トガリネズミ、「チビトガリネズミ（トウキョウトガリネズミ）」、「ニホンジネズミ」が生息しています。（ニホンジネズミはもともと北海道に生息しておらず、国内外来種として移入してきた種です）このうち、円山動物園周辺で生息が確認されているのは「オオアシトガリネズミ」です。円山動物園では、ニホンジネズミを除いた4種類（トガリネズミ亜科と呼びます）を飼育してきました。

トガリネズミ亜科は、ユーラシア大陸と北米大陸の比較的寒い環境に生息しています。北海道で最も広く分布しているのはオオアシトガリネズミで、体の大きさは、体重約10〜15g、全長約10cmです。最も小さいのはチビトガリネズミで体重約2g、全長約7cmと世界最小の哺乳類の一種です。食性は昆虫類が中心で、自分の体より大きな昆虫を仕留めて食べることもあります。生活のスタイルも種によってさまざま、オオアシトガリネズミは大きな前足で地中を掘り進み、土の中の虫を捕まえることが多いようです。バイカルトガリネズミとヒメトガリネズミは地上を中心に生活しており、最も小さなチビトガリネズミは地上だけでなく、軽い体重を生かして地面に生えている草本類の上を簡単に登っていきます。

手探り状態で始めた飼育

世界で初めてヒメトガリネズミの出産に成功

現在、円山動物園では北海道に生息しているト



捕獲されたオオアシトガリネズミ



根室調査捕獲後のチビトガリネズミ

態及び繁殖等、ほとんど分かっていない動物です。そこで、円山動物園では市民の皆様を知っていただくともにも、研究や保全を進める目的で飼育及び展示を行っております。

トガリネズミは、名前に「ネズミ」とついでいますが、ネズミの仲間（げっ歯目）ではありません。私たち人間と同じ哺乳類で、真無盲腸目トガリネズミ科に分類されます。真無盲腸目というのはあまり耳にしない言葉ですが、これはハリネズミやモグラが属しているグループです。つまり、トガリネズミはネズミよりもモグラに近い仲間といえます。北海道には「オオアシトガリネズミ」、「バイカルトガリネズミ（エゾトガリネズミ）」、「ヒメ

ガリネズミ亜科のうち、ニホンジネズミを除いた4種類を飼育しています。生きたトガリネズミを野生で観察することは非常に難しく分かっていないことが多いので、飼育を始めた当初は飼育方法も確立されていませんでした。そのため最初は手探り状態でしたが、様々な試行錯誤を重ね、現在は安定して長い期間飼育できるようになりました。しかし、繁殖については未知の部分が多いのが現状です。2021年には野生から捕獲したヒメトガリネズミの出産が世界で初めて確認され、無事成育しました。22年には、同じく飼育下のヒメトガリネズミで初めて交尾が確認され、妊娠、出産まで至りましたが、残念ながら成育することが出来ませんでした。現在も繁殖に取り組んでおり、研究機関と協力して新たな知見を得ています。

トガリネズミの仲間は、北海道に住む私たちにとって非常に身近な動物ですが、その体の小ささゆえに注目が集まりにくい動物でもあります。開発などでトガリネズミの仲間が生息できる環境が失われることにより、私たちが知らないうちにその生息数が減少し、絶滅の危機に陥ってしまう可能性があります。このような動物を動物園で飼育・展示することにより、様々な知見を集めるとともに多くの方にトガリネズミについて知っていただくことで、北海道の豊かな自然と生物多様性の保全につながると思っています。

【トガリネズミ】

文・写真◎飯島なつみ

(札幌市円山動物園飼育展示・診療担当課 動物専門員)
いじま・なつみ 東京農業大学農学部バイオセラピー学科卒業。卒業後は(公財)横浜市緑の協会にて嘱託職員としてよこはま動物園ズーラシアに勤務し、現在に至る。エゾユキウサギ・モルモット・トガリネズミ担当。31歳。神奈川県出身。

【ニホンザリガニ】

文・写真◎片岡雅人

(札幌市円山動物園飼育展示・診療担当課 動物専門員)
かたおか・まさと 北海道エコ・コミュニケーション専門学校卒業。卒業後は一般企業、円山動物園の嘱託職員を経て現在に至る。ニホンザリガニ、爬虫類・両生類担当。32歳。北海道出身。

札幌市円山動物園

〒064-0959 札幌市中央区宮ヶ丘3番地1

<https://www.city.sapporo.jp/zoo/index.html>

ニホンザリガニ

日本にいる3種のザリガニのうち
唯一の在来種ニホンザリガニ

ニホンザリガニは北海道全域に生息する日本の固有種です。しかし近年は絶滅危惧種に指定されており、身近な存在であったはずのニホンザリガニが希少な存在となってしまいました。平成以降に生まれた人の中にはニホンザリガニを知らない人もいるのではないのでしょうか。

現在日本には3種類のザリガニが生息しています。この中で唯一の在来種であるのがニホンザリガニです。全長は4〜8cmとザリガニの中では小さく、個体差はありますが落ち葉のような茶褐色の体色をしています。主に落ち葉を食べて生活していますが、雑食性のため水面に落ちてきた虫なども食べます。きれいで、夏場でも20℃以上にならない冷たい水でないと生きられないため、山の中の湧水が染み出ているような沢や湖などに生息しています。また夜行性で動きも遅いため、生きていくためには身を隠すことのできる石や流木などが豊富にある環境が必要です。また餌となる落ち葉を作り出す落葉広葉樹が豊富にあることも重要となります。そのため、生息分布は北海道全域と東北三県（青森、秋田、岩手）の一部の地域のみとなっています。



フィールド調査の際の発見個体の体側

なっています。これらの事から特定外来生物にも指定されています。札幌市内を流れる豊平川などでもウチダザリガニの生息が確認されており、ニホンザリガニへの影響が懸念されています。

円山動物園で立ち上げた 保全のためのプロジェクト

札幌市内では現在でもニホンザリガニの生息は確認されていますが、ここ数年で生息が確認できなくなった場所も出てきています。実際に円山動物園でも、敷地内を流れている沢で過去にはニホンザリガニが生息していましたが、いつの頃からか今では見られなくなっていました。こうした事態を受け、円山動物園では2009年に札幌市内、特に円山地域のニホンザリガニの保全（補強・再導入）を目的としたプロジェクトを始動させました。それと同時に非公開型のニホンザリガニ



ニホンザリガニ



池・小川の整備風景



ニホンザリガニの飼育設備



幼体の飼育

生態系への影響が懸念される 外来種ウチダザリガニ

近年は住宅地開発やコンクリートによる三面護岸などの治水工事による生息地の破壊、さらに地球温暖化による水温上昇、乱獲、外来生物の影響を受け生息数が減少しています。外来生物の中でも特に影響が懸念されているのがウチダザリガニです。

ウチダザリガニは1920年代にアメリカから食用として道東の摩周湖へ導入され、それ以降、人の手によって全道各地に持ち運ばれました。元々北西アメリカの冷涼な地域で生息していた彼らにとって、北海道は生息・繁殖するためには最適な環境だったため、瞬く間に増殖してしまいました。ウチダザリガニは全長15cmと日本に生息するザリガニの中では最大となります。食欲も旺盛で、ニホンザリガニや北海道に生息するその他の希少な昆虫や水草などの在来種を捕食してしまいうため、生態系への影響が懸念されています。またニホンザリ



ウチダザリガニ

ニの飼育施設を建設し、ニホンザリガニの飼育・研究を開始しました。施設にはきれいで冷たい水でしか生きることのできない彼らのため、水をきれいにするろ過装置やサーモセンサー付きのクーラーなどが整備されています。始動から13年経った現在は、約50頭のニホンザリガニの飼育をしており、日々繁殖技術の確立、生態解明に向けて研究を続けています。また動物園内の活動だけではなく、札幌市内の公園や沢でニホンザリガニの生息状況の調査を行っています。将来、ニホンザリガニを再導入・補強することになった際に遺伝的な攪乱が起きないように、調査の際に捕獲されたニホンザリガニからDNAサンプルを採取し、研究機関に解析してもらうなどの準備を進めています。23年秋からは「動物園の森」において、飼育下繁殖個体の試験放流を行うための小川の整備を開始しました。試験放流した個体が小川で定着した際には、来園者、市民の方を招き自然に近い環境でニホンザリガニを観察してもらえるようなガイドを行っていきたく考えています。

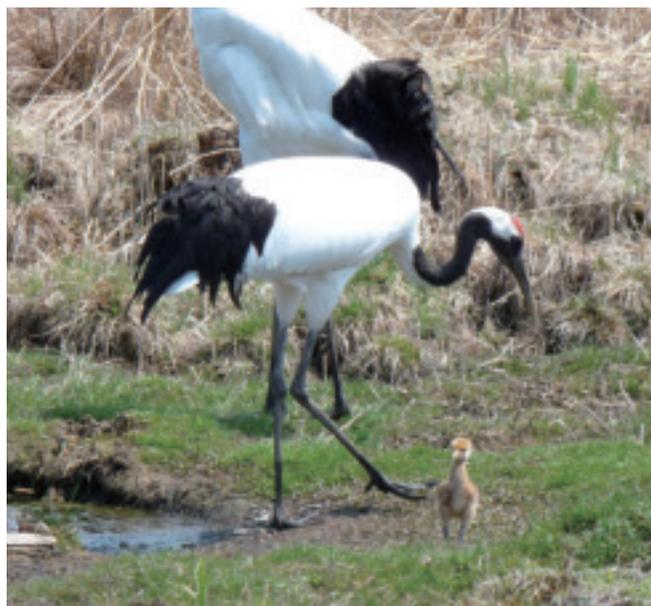
現在は絶滅危惧種となってしまうニホンザリガニですが、私たちの行動次第では昔のように市内の身近な川でニホンザリガニが生息できる環境を取り戻すことができるかもしれません。ニホンザリガニや北海道の豊かな自然を後世に残していくために、自分ができているのか考え行動することが重要なのではないのでしょうか。



鳴き交わし



ダンス



タンチョウの親子。上の写真は生後半



一時は絶滅したと考えられたタンチョウ。
釧路湿原の奥地で再発見されてから100年、
地元をはじめ多くの人の努力で生息数が増えてきた。
釧路市動物園の保護活動も、その一端を担っている。

タンチョウはツル目ツル科に属する大型の水鳥で、体長約140〜150cm、体重は約6〜10kg、翼を広げると240cm程度になります。世界には15種のツル類がありますが、その中でも大型の種です。主に湿地に生息し、過去には本州にも分布していましたが、狩猟による個体数減少や、開発に伴う生息地の減少などにより、明治時代に一度絶滅したと考えられていました。そんなタンチョウが数十羽、釧路湿原の奥地で再発見されたのが1924年（大正13年）で、今年2024年はそこから100年が経過したことになります。再発見以降、地元住民や行政などを含めて様々な保護活動が行われるとともに、国の特別天然記念物に指

定され、また種の保存法に基づく国内希少野生動物種にも選定されました。これらの成果もあってか、現在では個体数が約1800〜1900羽にまで回復し、北海道東部だけでなく空知、日高地方や宗谷地方にも生息域が広がっています。ただ、個体数が増え分布も広がりましたが、同時に様々な課題もまだ残っているのです。

希少野生動物種の保護

野生動物の絶滅を防ぐためには、大きく分けて、本来の生息地での個体の増殖や生息環境の改善を図る「生息域内保全」と飼育下繁殖個体の増殖、再導入によって野生個体群を補強する「生息

主に釧路市に関係するタンチョウ保護の動き

1924 大正 13	釧路湿原内で再発見
1950 昭和 25	阿寒町で人工給餌成功
1952 昭和 27	北海道の一斉調査で33羽が確認
1958 昭和 33	釧路市丹頂鶴自然公園開設
1965 昭和 40	阿寒町タンチョウ愛護会結成
1967 昭和 42	特別天然記念物指定（地域を定めず）
1968 昭和 43	鶴公園で人工繁殖に成功
1975 昭和 50	釧路市動物園開園
1977 昭和 52	阿寒町タンチョウ観察センター開館
1981 昭和 56	阿寒町のタンチョウ飛来地域が鳥獣保護区指定
1982 昭和 57	タンチョウ保護増殖センター開設
1993 平成 5	絶滅の恐れのある希少野生動物種の種の保存に関する法律制定 国内希少野生動物種指定保護増殖事業計画の策定
1996 平成 8	阿寒国際ツルセンター開館
2011 平成 23	ニトリ・サルルンカムイプロジェクト
2013 平成 25	環境省タンチョウ生息地分散行動計画策定
2015 平成 27	給餌場における給餌量調整開始
2023 令和 5	環境省タンチョウ生息地分散行動計画改定

域外保全」の2つの考え方があります。動物園など飼育施設では主に後者について、飼育下繁殖や飼育下個体群の維持などに取り組んでいます。また一般に動物園や水族館には「希少野生動物の保護と繁殖」、「動物の生態、繁殖等に関する調査研究」、「動物や自然環境に関する社会教育」そして「余暇を楽しむレクリエーションの場」という4つの大きな役割があるとされ、国内の各園はそれぞれの地域や実情に合わせて様々な課題に取り組んでいます。

釧路市動物園は北海道東部の釧路市にあり、1975年に開園しました。今までタンチョウやシマフクロウ、クマタカなど、北海道を代表する種の飼育や繁殖に取り組んできており、現在哺乳類と鳥類合わせて約300点を飼育しています。ここでは、釧路市で行われているタンチョウの保護増殖事業について紹介していきます。

冬季の給餌事業

絶滅寸前だったタンチョウが再発見され、そこから様々な活動、当初はエサとなる作物の栽培や、魚の養殖などが行われていました。そんな中で1950年の冬、阿寒町で地元農家によるタンチョウへの給餌が偶発的に始まりました。この給餌は、冬季の餌を補うために続いており、現在では環境省の委託事業として、釧路市は阿寒国際ツルセンターの隣にある阿寒給餌場で給餌を行っています。

文・写真◎吉野智生
(釧路市生涯学習部動物園 学芸専門員)

よしの・ともお 酪農学園大学大学院獣医学研究科博士課程修了。博士(獣医学)。環境省九州地方環境事務所職員を経て現職。千葉県出身。

釧路市動物園
〒085-0204 釧路市阿寒町下仁々志別11
<https://www.city.kushiro.lg.jp/zoo/index.html>

【釧路市動物園】

繁殖期が終わり冬が近づくと、タンチョウは縄張りを離れて移動を始め、群れを作り、給餌場を含む越冬地に移動します。これは普段使っていた水辺などが凍ったり、雪に覆われたりして使えなくなるため、凍らない水辺など餌が取れる安全な場所に集まっていくためです。給餌はおおむね11月下旬から3月上旬にかけて行われ、魚を与えていた時期もありますが、今はトウモロコシのみを給餌しています。

一時期は1日に200羽以上が給餌場を利用していた時代もありますが、近年阿寒給餌場を利用しているのは約150羽とみられ、阿寒川流域一帯ではおよそ250羽が越冬します。給餌場では安全に餌が取れるためタンチョウが集まりやす。一方で個体数が増えて密度が高まると別な問題、例えば近年の高病原性鳥インフルエンザのように、感染症による大量死のリスクが発生します。そのため過度の集中を防ぐ目的で、2015年度から段階を追って年間の給餌総量を緩やかに減らし、飛来羽数に合わせた給餌量にする給餌量調整が始まりました。

そんな中で2022年以降、高病原性鳥インフルエンザに感染したタンチョウの事例が複数確認されました。まだ集団で発生はしていませんが、同じツルの仲間のナベツルやクロツルでは国内や海外の越冬地で集団死が発生しているため警戒する必要があります。そのため2023年度には

す場合は風切り羽の一部を切る切羽を行い、ケージから飛び出せないようにします。過去には羽を切らず出入り自由に飼育していましたが、現在は事故の防止や鳥インフルエンザ防止などのため切羽しています。風切り羽はだいたい2年に1回抜け落ち、1カ月半程度かけて新しくなります。そのため、飼育個体は健康診断を兼ねて定期的に捕獲しています。

飼育下個体群の管理

タンチョウの飼育下個体群は最初に飼育した5羽と、鶴公園に飛び込みそれらとつがいになった野生個体から始まりました。大きく分けて3つの家系があり、これに傷病保護され野生に戻れなかった個体や、新たに飛び込んできた個体などが加わって構成されています。飼育下で生まれた個体は、当初は設立目的に従って放鳥が主でしたが、現在は個体群の世代交代や新たな血統を加えていくため、血統を確認しながら方針を決めています。放鳥する場合は環境省指定の足環をつけ、残す個体は切羽して管理します。ヒナが大きくなり、だいたい2月ごろになると子別れが始まるので、残す個体は捕獲して別のケージに分け、放鳥個体はそのまま親が追い出すに任せます。足環がついてるので、目撃情報があればどこに行っただか、何年生きたか、繁殖したかなどがわかってきます。1999年以降で33羽を放鳥していますが、その

環境省と地元関係者の間で、給餌場での高病原性鳥インフルエンザ発生時対応について方針を協議しました。また地域の人手と協力してねぐらの状況調査や、ツルセンターのビオトープを整備して冬の間も凍らない水辺を作り出すことで、自然採食できる場所を作る活動なども行っています。給餌に集まる様子だけでなく、自然に近い環境下で餌を採る様子を近くで観察できるようになり、タンチョウの越冬について深く知ってもらう機会になっています。

タンチョウの飼育の歴史

さて、次に飼育下の話に移っていきます。釧路市におけるタンチョウの飼育は、実は動物園よりも古く、1958年に開設された釧路市丹頂鶴自然公園（鶴公園）から始まりました。鶴公園は人の関与の下でタンチョウを自然繁殖し、育った個体を野外に放鳥すること、および飼育繁殖に関する知見を集めることを目的に設立されました。鶴公園での飼育は、野生から捕獲された5羽のタンチョウから始まりました。飼育は手探りで行われ、やがて野生から飛来した個体と



釧路市丹頂鶴自然公園

ペアが成立し、繁殖が始まりました。1964年には初めて人工育雛に成功し、また1968年に初めて人工繁殖に成功しました。そうして育てたヒナの多くは野外に放鳥されました。1975年には釧路市動物園が開園、その後1982年に動物園内にタンチョウ保護増殖センターが開設され、タンチョウの飼育数も増えていきました。現在では、1996年に設立されたツルセンターも含めた3施設でタンチョウを飼育しています。

タンチョウの飼育下繁殖

タンチョウはだいたい3月下旬から産卵を始め、早ければ4月末にヒナが生まれます。卵は雌雄交代で抱くので、つがいで行動していたタンチョウが片方ずつ確認できるようになったら産卵したことがわかります。産卵が判明したら、数日してから卵を一度回収してふ卵器に入れ、巣には擬卵を入れておきます。回収した卵は大きさを測ったり、暗いところで光を当てて有精卵かどうかを調べたりします。有精卵はおおよそ32日でふ化するので、ふ化予定日の数日前には親元に戻します。過去にはそのままふ卵器で温め、人工飼育を行ったこともありましたが、現在では基本的に親に育ててもらい自然育雛を行っています。

ヒナは生まれて3カ月程度で羽が生えそろってくるので、だいたいそのあたりで一度捕獲し、計測や採血、性別判定を行います。また飼育下に残



タンチョウの巣



タンチョウの卵



卵に光を当てる



切羽前



切羽後

うち約4割がつがいを形成し、このうちヒナを育てたことが確認できたのは8つがいました。このように、飼育下からの放鳥も野生個体群の維持に一部寄与しています。

一方でタンチョウは縄張りを強く意識する習性があるため、ある程度広い飼育スペースが必要で、つがいまたは単独でしか飼育できません。そのため他園にも協力を仰ぎ、現在は釧路市動物園だけ

でなく、旭山動物園、円山動物園、そして岡山後楽園にブリーディングローン（繁殖貸与）という形で北海道産のタンチョウが暮らしています。また2011年に、釧路市動物園と台北市立動物園との間で学術交流の覚書が交わされ、また株式会社ニトリホールディングスと釧路市、北海道の連携協定による「ニトリ・サルンカムイプロジェクト」が行われました（2015年まで）。その一環として

動物園・水族館の連携で動き出した 北海道産いきもの保全プロジェクト

生物多様性の新たな目標「30by30」や「ネイチャーポジティブ」などに向けて、道内8カ所の動物園と水族館が協力して取り組む「北海道産いきもの保全プロジェクト」。8つの園館の連携を活かし、希少ないいきものの保護や自然環境の保全を目指す。



旭川市旭山動物園統括園長 **坂東 元**

ばんどう げん
1986年酪農学園大学酪農学部獣医学修士課程卒。同年5月旭川市旭山動物園就職。95年飼育展示係長、2004年副園長、09年園長、24年統括園長。97年の「こども牧場」から「ペンギン館」「あざらし館」「ちんぱんじー館」「レッサーパンダ舎」「エゾシカの森」「きりん舎かば館」などの施設のデザインを担当、数々のアイデアを出し具体化してきた。また手書きの情報発信やもぐもぐタイムなどのソフト面でも係の中心となり具体化、システム化を図ってきた。ボルネオでの活動も本格化しており、マレーシア国サバ州での野生生物レスキューセンターの建設に着手し第一期工事を終える。
著書／『動物と向きあって生きる』（角川学芸出版）、『旭山動物園へようこそ』（二見書房）、『夢の動物園』（角川学芸出版）、『ヒトと生き物 ひとつながりの命』（道友社）

皆さんは、30 by 30やネイチャーポジティブという言葉聞いたことがあるでしょうか？ SDGsやゼロカーボンは、中身はともかく多くの人が見聞きしているのではないかと思います。2030年までに現在進行形で急速に進行する温暖化や気候変動を食い止めないと持続可能な未来を迎えることができない。そんな危機感から、SDGsには地球環境に関する分野で達成すべき目標に向けて包括的な対策が具体的に記されています。最近では50年にはゼロカーボンを達成！と国も市町村なども目標に掲げていますね。

さまざまな努力は始まっていますが現実はまだよい方向に向かう兆しを感じることなく、危機感が増していると感じている人も多いのではないのでしょうか。そこでさらに踏み込んだ、これまでとは別に立てられた目標が30 by 30（サーティ・バイ・サーティ）ということになるのかなと考えます。環境省のHPで30 by 30とは、21年G7サミットで約束した目標。「それぞれの国が、生物多様性の損失を食い止め、回復させる（ネイチャーポジティブ）」というゴールに向け、30年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標です。」と記されています。

台北市立動物園にもタンチョウ1つがいが貸与されることになり、2022年には待望のヒナが生まれています。このように、他園とも連携しながら、飼育下繁殖や学術交流が行われています。

野外からの保護

現在釧路市で飼育しているタンチョウは、飼育下で生まれたもの、野生からの飛び込み個体、そして保護収容されたのち自然に戻せず飼育下に編入した個体を含みます。タンチョウの保護収容は1969年から記録が残っていて、当初は鶴公園で、動物園が開園してからは動物園が中心となって行ってきました。2023年度までに約1050個体のタンチョウが保護または死体で収



道路を横断するタンチョウ



牛舎近くのタンチョウ



牛舎内に侵入



上：胃内容物
下：骨格標本



容され、このうち生きて収容されたのは約4割、一定期間生存したものは2割弱、放鳥（飛去含む）したものは1割以下です。軽傷のものや治療により回復したものは放鳥し、放鳥できなかったものは飼育下繁殖を試みたり、展示や教育に利用したりしています。収容された死体や、収容後死亡した個体は全て解剖し、死因の解明や各種検査を行っています。また解剖後の死体や内臓は基本的に冷凍保管し、大学等の研究機関と協力して病原体、寄生虫、重金属や環境汚染物質などの調査研究や、剥製、骨格標本の作製などを行っています。また得られた結果を基に、各所での展示や学校向け出前講座、来園者へのガイドなどを実施し、タンチョウの現状を伝える活動も行っています。

タンチョウと人との共生に向けて

動物園を含む様々な活動の結果、一度絶滅の危機に瀕したタンチョウは、生息数を回復してきました。一方で生息地は釧路地域を含む道東に集中しており、例えばメガソーラーなどを含む開発による生息地の減少や、農地を含む人の生活圏への接近による農業被害の発生、電線や車、列車などの衝突事故の増加など、まだ様々な課題があります。道北や道央にも分布が拡大しつつある現状、タンチョウの保全のためには今まで行ってきた保護活動も含め、タンチョウと人とのよりよい関係について、現状を広く知ってもらいながら、模索していく必要があります。



トランクキットを使ったイベントでのガイドの様子



ヒグマのトランクキット



各園館から持ち寄ったワークショップ開催



ゴマフアザラシのトランクキット



8園館長合同プロジェクト発表（2022年）



北海道いきもの保全プロジェクト広報ポスター
現在、札幌市円山動物園、旭川市旭山動物園、おび
ひろ動物園、釧路市動物園、小樽水族館、サンピア
ザ水族館、登別マリパークニクス、サケのふるさと
千歳水族館の8園館が参加している

例えばゼロカーボン達成のために、陸でも海でも利用できるところは徹底的に利用しようとしたら、利益を上げるためとは別の意味での環境破壊に繋がりがねません。本末転倒です。例えば大雨による洪水や地震による液状化などは、人の都合で昔は川だったところを埋め立てた地域で起こりやすかったり。人が力業で豊かに快適にを求め続けてきたことが破綻への路だったと気づき、猛烈な反省を持って地球と向き合おうというメッセージに聞こえます。本来その土地が長い歴史の中で作り上げてきた地形も含め豊かな生態系を、言い換えれば生物多様性を今一度回復させ、今までよりも少し不便になることもあり、一手間かかることもあるけれど、そのことが自然災害の緩衝作用につながり、豊かで持続可能な未来に繋がるということです。極端な言い方ですが、まっすぐにした川を蛇行した川に戻しましょうということでしょうか。

30%といえば、北海道ならそれくらいはあるのではと思われるかもしれませんが、実は20%もないのです。いかに人優先に土地を利用してきたのかと驚きます。これからは国定公園や鳥獣保護区の拡大など北海道本来の環境、生態系を回復させ増やして行くこととなります。今までは、絶滅危惧種など希少な生き物を象徴に自然保護や環境保全の重要性をアピールする傾向にありましたが、自然環境エリアの回復とその割合30%を達成させるためには、より多くの人に絶滅危惧種などを支える生態系のピラミッドの底辺、今は当たり前に生きている身近な生き物たちに興味や関心を持ってもらい、その尊さや価値に気づいてもらうことがとても重要なことになってきます。

動き出した8園館の連携

さて前段が長くなってしまったのですが、これらの目標を達成するために動物園や水族館はどんな役割を果たせるのだろうか？ 数年前から北海道のJAZA（日本動物園水族館協会）に加盟する8園館（現在は9園館）の園館長会議で議論を始めていました。これまでも8園館では、それぞれの年間パスポートを、他園館を訪れた際に提示していただくと、割引料金を適応したり様々な協力、協働をしてきました。議論を重ねる中で、それぞれの園館で行っている地元の生き物の調査研究や飼育展示でも協力をして取り組み、来園者への普及啓発活動に繋がらないか、普及啓発するには自分たちの資質もより高めることができるようにしなければなど、具体的な協働の形が見えてきました。協働で活動を行う上での活動費をどう工面するかなど課題はまだありますが、とにかくできることから始めようということで見解は一致し、令和4年「北海道産いきもの保全プロジェクト」として活動を始めることになりました。傷病鳥獣（保護動物）のデータベース化や陸上、水中の分け隔てなくSNSでの発信の試行（まだ非公開）などを進めています。さらには、域内保全活動をされている団体などの活動に参加させていただくことにも取り組み始めています。昨年は旭山動物園でプロジェクトとしての初イベントも開催しました。このイベントの中で特に印象に残ったのは、動物園からはヒグマ、水族館からはゴマフアザラシの毛皮や頭骨の標本などを実際に触ってもらったりトランクキットを使っているガイドを行ったのですが、海の生き物と陸の生き物を同時に比較しながら触れて、話を聞けるのは自分たちにもとても新鮮で協働の成果の可能性を強く感じました。

プロジェクトが目指す5つの目標

北海道産いきもの保全プロジェクトの具体的な内容は記述すると固く感じられてしまうのですが次の通りです。

1 北海道の野生生物の域内・域外保全に係る活動

（1）傷病鳥獣の受け入れに関する情報共有

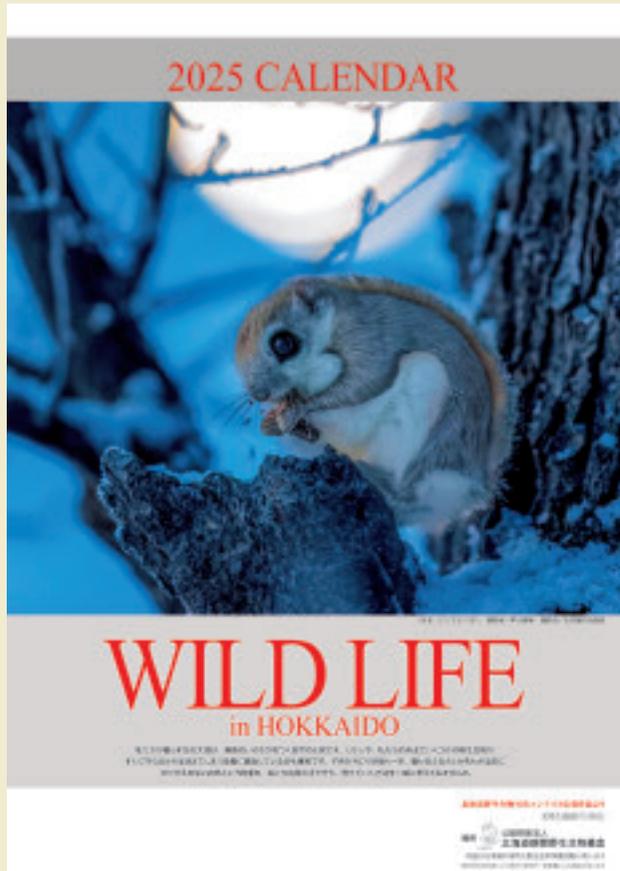
- ・ 長期的に繁殖や継代を目指す種については、道産動物種別調整の仕事を組みを構築する（希少種に限らない）。
- ・ 各園館で担当者を選出し、登録・調整種のデータベースを作成して、個体移動などの調整を行う。

（2）北海道産生物の飼育下における計画的な繁殖への取組による、遺伝的

毎月、素晴らしい大自然に出会えます。

北海道野生生物写真コンテスト応募作品によるカレンダー好評販売中!!

北海道野生生物写真コンテストの入賞・入選作を含む応募作品の中から、その月ごとにふさわしい写真を選び、カレンダーを制作しています。動物部門は、迫力ある写真を掲載した大判と愛らしい写真を掲載した中判の吊り下げ型。植物部門は卓上型で美しい花などを紹介し、使用後はポストカードとして使えます。



吊り下げタイプ・動物シリーズ
「かわいいどうぶつ」8枚綴り
(縦21cm×横29.7cm)
1,200円(税込)



卓上タイプ「野の花と樹」13枚
ケース付き(縦10.5cm×横20.5cm)
1,000円(税込)

吊り下げタイプ・動物シリーズ
「ワイルド・ライフ」13枚綴り
(縦51.5cm×横36.4cm)
1,500円(税込)

【お取り扱い書店】※10月以降、順次店頭に並ぶ予定です。

■道内は札幌市内の主だった書店。函館・旭川・釧路・小樽・帯広・根室の一部書店。

■道外は東京、大阪、福岡の一部書店。

「ワイルド・ライフ」と「野の花と樹」は50部以上まとめて注文いただきますと企業名・住所・電話番号・企業マークをサービスで印刷しています。

お問い合わせは
公益財団法人 北海道新聞野生生物基金
札幌市中央区大通西3丁目6 TEL 011-210-5773 FAX 011-210-5774



オンライン配信で各園館の取り組みを紹介

2 北海道の野生生物の保全に関する調査・研究

多様性の確保と飼育繁殖技術の確立

(1) 北海道野生生物保全会議の実施

3 教育普及啓発(域内保全活動団体との連携・協働)

(1) 展示パネルの作成・展示、SNSによる発信

(2) 巡回展・共通テーマによる同時企画展の開催

(3) シンポジウム・講演会の開催

4 職員研修

各園館職員の合同研修

・域内保全活動団体との交流

・フィールドワーク

・飼育技術研究会

5 施設の相互活用

傷病鳥獣の受け入れ、繁殖個体の飼育場所確保に係る各園館施設の積極的な相互活用

まだまだ夢のようなプロジェクトなのですが、夢や目標を掲げなければ活動も生まれません。希少種や保護対象動物種、有害動物など人が決めた分類で生き物を分け隔てるのではなく、それぞれの生き物の特性や習性を知ること、例えば私たち人の暮らし方にとっては「有害」になってしまうことに気づけ、「有害」にしないために私たちができることも見つけられるかもしれません。30 by 30、本来の自然環境を回復軌道に！は都合のいい生き物だけが増えるわけではありません。人と野生動物がともに暮らす未来はいいところだけのつまみ食いでは達成できません。活動のベースは北海道のいきものたちの素晴らしさ、何より北海道の素晴らしさを伝える活動なのだと考えています。皆さんがワクワクする活動に育っていきます！

「自然と人が共にある未来を目指して」

札幌市円山動物園は1951年に開園した北海道で最も古い動物園です。
野生動物の保全を通じた生物多様性の保全に取り組んでいます。

さっぽろ円山動物園 サポートクラブ



円山動物園の応援団体「さっぽろ円山動物園サポートクラブ」は、動物園の動物たちがより幸せに暮らせるよう、寄附を集めています。
皆様からの寄附は、動物舎に木を植えたり、特別なエサを買うために使います。

札幌市動物園条例



2022年6月、札幌市は動物園のあるべき姿を定めた国内初となる「札幌市動物園条例」を制定しました。

動物園応援基金



札幌市は「動物園応援基金」を設置し、積み立てられた市民の皆様からの寄附金を円山動物園の獣舎の改修等に活用していきます。

さっぽろ Sapporo Maruyama Zoo

円山動物園

札幌市中央区宮ヶ丘3番地1
Tel: 011-621-1426

<https://www.city.sapporo.jp/zoo/>

さっぽろ円山動物園サポートクラブ事務局(札幌市円山動物園内/電話番号同じ)

SAPP
RO